

●文部科学省●

経済社会の発展を牽引する
グローバル人材育成支援事業採択

行動力ある アジアグローバル人材の育成

事業報告書

[平成28年度]



亜細亜大学
亜細亜大学短期大学部

亜細亜大学・亜細亜大学短期大学部 学長 栗田 充治



平成29年3月30日に発表された、THE (Times Higher Education) 世界大学ランキング日本版において、本学が141位～150位にランクされました。日本版は、世界版に比べて、大学の教育面を重視した指標になっており、「教育リソース」「教育満足度」「教育成果」「国際性」という4分野11項目で大学の実力を評価するものです。本学は、国際性で高い評価を得て、この分野では全体の11位でした。本学の国際交流教育には自信を持っていましたが、このように高く評価されて、正直なところ驚いています。「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業を5年間続けてきた成果でもあると認識しています。

現在387名の留学生が本学で学んでいます。国籍は、人数の多い順に挙げると、中国、ベトナム、韓国、台湾、タイ、ミャンマー、ネパール、モンゴル、マレーシアなど、18の国と地域にわたります。ですから、このキャンパスそのものが、アジアン・キャンパス、国際交流の場となります。

海外に出かける方では、1989年に亜細亜大学アメリカプログラム(AUAP)という5ヶ月間の語学研修などを行なう派遣留学プログラムを開始し、これまでに合計13,440人が参加しました。

アメリカ以外の19の国と地域に派遣する留学プログラムと合わせると、これまでに約17,000人を超える学生が留学を経験していますので、本学学生の留学経験率は約20%、5人に1人が留学していることとなります。16単位以上認定を伴う留学派遣数では、関西外国語大学、早稲田大学に次いで、日本で3番目に多い大学です。

中でも、中国・大連での5ヶ月間の語学研修とインターンシップを組み込んだアジア夢カレッジ～キャリア開発中国プログラム(AUCP)は、優れたプログラムを表彰する日本インターンシップ学会の賞を一昨年、東京大学などと一緒に受賞しました。これは、亜細亜という名前を持つ大学でなければ出来ない留学プログラムであると、誇りに思っています。


グローバル時代に生きて行くには、若い内に、一度は、海外に出て、外から日本を見る経験と視点を持つことが必要だと思います。本学は、「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業の成果を引継ぎ、主要な活動を継続して行く体制を整えました。

本報告書を御覧の皆様のご助言・ご指導を今後とも宜しくお願いいたします。

平成29年3月吉日
学長 栗田 充治

●目次●

平成 28 年度 活動報告(時系列)	5
推進本部会活動実績	10
ワーキンググループ活動実績	11
多文化インターンシップ	12
多文化フィールドスタディー	12
のぞきみ!多文化きっちゃん	13
学習・活動記録ファイル	15
学習成果記録帳	15
英語および TOEIC®	16
地域言語	17
キャリア支援	18
危機管理セミナー	19
学習支援環境整備	19
海外留学フェア	20
ホームページ (G人材専用/多言語サイト等) からの情報発信	21
事務職員研修	22
《海外出張報告》	
多文化インターンシップ	
シンガポール (8 月)	24
中国(8 月)	25
マレーシア・シンガポール(8~9 月)	25
中国(8~9 月)	27
韓国(8 月)	30
韓国(3 月)	31
多文化フィールドスタディー	
ベトナム(8 月)	32
アジア夢カレッジキャリア開発中国プログラムー	
現地受入関連	33
オリエンテーション及びキャリア指導など	34
キャリア研修等	36
管理部門執行部との協議	36
修了式、企業訪問等	37
NAFSA 年次大会出展	
デンバー・ソルトレイクシティ (5~6 月)	40
AUAP	
ニューヨーク州・オールバニ市 (7~8 月)	43
ユタ州・ソルトレイクシティ、ニューヨーク州・オールバニ市 (3 月)	45
新規協定大学・インターンシッププログラム開拓	
インド(5 月)	46
インド・シンガポール(10 月)	46
海外交流拠点開設	
シンガポール	48



**平成 28 年度
活動報告
(時系列)**

前期 4 月

■時期・概要（項目）

- グローバル・ビジネスリテラシーシステムを継続利用
- 海外留学フェアの開催
- SNS の継続利用と多言語化ホームページでの情報発信
- CNNj 学内放送開始

■計画内容

- グローバル・ビジネスリテラシーシステムの継続利用により、各学生の留学成果を明確化する。今年度は、本システムの英語バージョンを利用し、海外協定校留学担当スタッフによる学生指導を開始する。
- 学内の国際交流ラウンジで海外留学フェアを開催し、留学希望者のさらなる増加をはかる。
- 前年度までに構築済みの多言語ホームページや SNS による、国内外への情報提供をさらに本格化する。
- CNNj の学内放送（学内テレビ、イントラネット）を開始する。

■活動実績

- グローバル・ビジネスアセスメントシステムの継続利用によって、学生が留学の目的を自覚し目標達成に努め、留学生生活を有意義過ごす環境を提供できているが、その中で、特に iPad を活用して日常的にシステムにアクセスした学生ほど、帰国後に、留学の意義や、より良い成果を得たことを自覚できている。また、マニュアル等の英訳により、現地スタッフの理解がより深まり、留学先大学のキャリアセンターとの連携もでき、英語による模擬面接を受けることが可能となった。
- 海外留学フェアでは、特に新入生の海外に対する不安等を払拭し、海外留学への興味を喚起し、希望者の増加につなげることができた。特設ブースでは、留学経験のある先輩学生が、新入生の質問に対応しているの、気楽な雰囲気の中で相談できることが、高い評価につながっている。また今年も期間中に保護者が参加し、留学に関する様々な質問をし、保護者と学生と一緒に留学準備をできるようにした。
- SNS の利用による情報発信は、特に新入生に対して、LIVE 感、臨場感を生むよう、グローバルに活躍することに対する、意識向上を図ることができた。また、新入生のみならず、海外で活躍している卒業生等にも注目されるようになった。さらに、多言語ホームページでは、学内外の様々なイベントも含め、広く情報発信しているため、学生におけるグローバル化に対する意識が変化してきている。

前期 4～7 月／後期 10～1 月

■時期・概要（項目）

- 英語能力測定試験及び地域言語能力試験の実施
- 多言語チューターの活用

■計画内容

- 英語以外の地域言語の伸長度を測定するために、各言語の検定試験を実施する。また、最終学年の英語力の伸長度を測定するために 4 年生全員を対象に TOEIC®試験を実施する。
- 英語やその他地域言語のチューターを活用し、学生達に効率的な勉強方法を習得させる。

■活動実績

- 英語に関して、入学直後から 4 年次まで定期的に TOEIC®受験の機会を与えることで、学習意欲の維持・向上を可能にしている。また、地域言語の公的検定の受験を義務付け目標を設定したことにより、学生の到達度及び学習内容の認知を促し、勉強意欲を大きく高めることができた。公的検定試験のある中国語、インドネシア語、スペイン語、韓国語で受験が増した。
- 本学部が重視する地域言語（英語以外のアジア系言語：中国語とインドネシア語）のチューターによる語学学習によって、学生たちは過度の緊張感なく、効率よく学習することができた。

前期 4～7 月／後期 9～1 月

■時期・概要（項目）

- キャリアカウンセラーによる低学年向けキャリア形成基本プログラムの実施、及び高学年向けグローバル・キャリア形成支援プログラム（海外インターンシップ等参加予定学生向け含む）の実施

■計画内容

- キャリアカウンセラー等の専門家による、低学年・高学年向けキャリア関連プログラム（マナー研修等含む）を開講する。本講義では、学生が各自で将来の方向性を考えられるように、企業動向等だけではなく、目的意識の重要性等を意識させる。高学年向けプログラムでは、グローバル・キャリアを意識させる内容に特化させる。

■活動実績

- 留学での経験を就職活動にうまくつなげることができなかった学生にとって、キャリアカウンセラーが持っている豊富な経験や、民間企業人事採用担当者等から得た膨大な情報は、キャリアを考える上で、大変有益なものとなった。また、ロールモデルを知ることにより、明確なキャリア形成意識を醸成することができた。「グローバルエアライン講座」では、合計 20 名の学生が、グローバルマインドと併せてビジネスマインドを習得し、エアライン業界のみならず、就職活動に必要な能力を身に付けることができた。また、マナー研修では、具体的なマナーの所作とともに、グロー

バルに活躍するうえで不可欠な諸々の心構えを示すことで、学生の意識変革が図られ、大変効率的かつ効果的にマナー習得ができた。専門家によるコンサルティングでは、他大学での経験も踏まえたアイデアが提供され、学生にとってより有効的な環境の創出につながった。

通年4～3月

■時期・概要（項目）

- 学習支援環境の充実化

■計画内容

- グローバル学習支援環境を充実化すべく、国際交流ラウンジを中心に、英語学習、キャリア開発研修、留学・インターンシップ情報提供、留学生交流等の環境を整備する。

■活動実績

- ラーニングコモンズ「ASIA PLAZA」を有効利用するための、東日本第2ブロックイベント（英語プレゼンテーション大会）は、学生においてはプレゼンテーションを創りながら、施設利用の新しい方法や考え方を学ぶことができた。本施設を利用して学生指導を行った結果、GGJ 東日本第2ブロック英語プレゼンテーション大会では、準優勝という結果を得ることができた。また、教職員はその運営方法等を習得することにより、新たな学生指導の方法等を見出すことができ、付加価値の高い教育サービスの提供が可能となった。今回の経験を今後に生かすために、「輝く英語プレゼンマニュアル（教員用）」及び「輝く英語プレゼンポイント（学生用）」を作成し、教員や学生が機能的に学ぶことのできる環境ができた。

前期5～6月

■時期・概要（項目）

- 国際教育交流年次大会（NAFSA）への参加
- 危機管理シミュレーションの実施
- 他大学合同英語プレゼンテーションの実施

■計画内容

- 協定校を効果的に増やすべく、国際教育交流2016年度大会（NAFSA）に出展し、参加大学とのネットワーキングを構築し、その後の協定締結を実現する。
- 平成26年度前期に完成させた、「海外危機管理マニュアル」を利用し、学内において不測の事態を想定した危機管理シミュレーションを実施することにより、学生及び教職員の危機管理意識の向上も図る。
- 他大学合同英語プレゼンテーションを実施し、学生に英語プレゼンテーション能力を強化する。

■活動実績

- 「国際教育交流年次大会＝NAFSA」に参加し、本学の協定校が少ない地域、とくに中東の大学と意見交換ができたことにより、本学との協定締結の可能性が高まった。配布物としての英文大学案内のコンパクト版（改訂版）は、来場者にとって大変手軽で利便性が高く、本学の教育内容等を理解・納得させるのに有効で、成果として、State University of New York（オールバニ校）及び University of Utah と協議し、新規提携校協定を結ぶべく、仮協定を結ぶことができた。2017年の秋から両校に本学学生を留学させるとなった。この締結により、留学費用を比較的安価に抑え、大学留学と同様の効果を出すことが可能となった。また、米国非営利教育機関との連携により全米のネットワークの活用ができるようになり、学生が効率的に留学先を選択することを可能になった。
- 危機管理においては、国際交流担当部署のみならず、学内関連部署や教員との連携方法を確認することができ、危機発生時において学生・保護者に対し不利益が生じない体制づくりの方法を確認することができた。危機管理ハンドブック及びガイドラインによって、全プログラム共通の対応を示すことができ、危機発生時に、学生、教職員が同じ危機意識のもとで行動がとれるようになった。
- 5 大学からの学生たちが合同で、しかも英語のみにて研修を受講し、お互いに共同で目標達成するということにより、プレゼンスのみならず、社会人に必要なコミュニケーション能力、チームワーク力、リーダーシップ力等のビジネスリテラシーをも身に付けることができた。

前期5～7月／後期10～12月

■時期・概要（項目）

- TOEIC®（学生：TOEIC プレミアムクラブ：英語習熟度別カウンセリング型授業・職員向け）専門講師（外部）による講座開催

■計画内容

- 学生の英語能力向上をはかるべく、TOEIC® 外部専門講師による課外授業を開講し（TOEIC プレミアムクラブ：英語習熟度別カウンセリング型授業）、本補助事業で目標としている英語能力レベルの達成に向けて課外教育をさらに強化する。また、職員の外国語運用能力向上の観点から、同様に外部講師による授業を開講する。

■活動実績

- TOEIC®等の英語課外講座（11講座）を年間で延べ92名が受講した。能力別及び目標別の課外講座で少人数方式により、きめ細かな指導ができる体制を構築した。その結果、学生たちにとっても目標設定がしやすくなり、平成29年3月末現在で、国際関係学部4年

生のうち、13.4%はTOEIC®700点以上取得、37.6%が600点以上を取得、64.8%が500点以上を取得した。交換留学制度に関しては、より多くの志願者が応募できるようになった。

夏季休暇中8～9月

■時期・概要（項目）

- 海外授業（インターンシップ、フィールドスタディー）の実施

■計画内容

- 一昨年度より開講された海外授業（インターンシップ、フィールドスタディー）の地域、企業数を拡大し、その実施状況を現地にて把握する。

■活動実績

- 多文化インターンシップでは、韓国、中国、香港、シンガポールの4つの国・地域で14社（韓国1、中国11、香港2、シンガポール6）に20名を派遣した。学生たちは海外で働くために必要な能力やビジネスで必要とされる語学力に気づき、帰国後はさらに高い目標感を得ることができた。また、多文化フィールドスタディーは、2ヶ国にそれぞれ、中国10名、ベトナム8名の計18名を派遣した。学生たちは現地の大学生等との交流を通じ、共同でプロジェクトを行い、協働することの難しさや楽しさに気づき、主体的に学ぶ姿勢を身に着けることができた。参加案内冊子の作成・配布により、下級生の次年度参加意欲を促進させることができ、また参加準備においても、現場に即した目標立てに役立った。

夏季休暇中8～9月／春季休暇中2～3月

■時期・概要（項目）

- 留学先へのお出張における学生面談指導及び企業視察による研修状況の確認
- 職員対象語学研修
- 協定校視察研修
- 海外でのオムニバス講義の講師依頼・調整のための出張

■計画内容

- 留学プログラム実施国の中から重点校に教職員が赴き、各学生に直接指導を行い、留学中の目標達成管理の進捗状況を把握し、学生のモチベーション維持を図る。サンディエゴ州立大学においては、現地の社会文化やコミュニティの特徴などをテーマに、「多文化社会セミナー」を開催し、現地の事情に精通させたいうで、日系企業を含むサンディエゴ企業で2日間かけて視察し、各社の事業内容等のレクチャーを受ける「企業視察ツアー」を実施する。
- 事務職員の外国語力向上のため、海外研修を実施する。

- 本学若手職員が協定校を訪問し、現場での教育内容、異文化生活などを視察して高校生やその保護者等への充実した情報提供を行って、より効果的な情宣活動を行う。
- 海外授業のプログラムの一環として、現地日系企業代表者等によるオムニバス講義を実施すべく、意見調整等のために出張する。

■活動実績

- 留学期間中の現地での学生指導は、アセスメントシステムを利用して、留学前に立てた目標の達成状況を把握して行うことができ、残存留学期間を有意義に過ごさせるのに効果があった。また、サンディエゴ州立大学での「多文化社会セミナー」での、現地で活躍する日本人も含めた起業家等との意見交換は、海外で働くことの楽しさ、難しさを実感させ、学生に意識変革を起こし、留学期間の後半部分をさらに有意義に過ごさせることができた（帰国以後学生からのアンケートによると、本プログラムの早期実施希望が多数あり、パイロットプログラムの早期実施的ではあるが、2017年2月サンディエゴ州立大学派遣学生に関しては、同3月に実施した。学生たちからは座学では決して学ぶことのできない環境に接し、グローバルで活躍するための能力について理解し、今後の学習の目標立てに役立った）。さらに、アリゾナ州立大学での「企業視察セミナー」では、日本との関係が深い学生にも身近な企業を訪問し、就職活動の際の有益な情報を得ることができた。
- 中国における企業訪問を通じたオムニバス講義内容の打ち合わせは、学生の留学中の情報収集をより効率的にするだけでなく、人間関係の構築にも役立っている。
- State University of New York（オールバニ校）及びUniversity of Utahへのお出張により、現地の治安、授業レベル、宿泊施設等を視察することができ、協定締結のための基礎情報の入手ができた。また、関係者との意見交換により、協定締結までの具体的なロードマップが明示され、締結までの業務効率化が図れた。この出張により、2017年秋よりパイロットプログラムとして両大学に10名ずつ学生を派遣することが決定された。
- 米国ワシントン州への職員派遣は、授業内容や生活環境を知ることにより、AUAP（アメリカ留学）事前研修等において、学生に有益な情報提供を可能としている。
- 新規協定校獲得のための出張により、交換派遣留学を含む多彩な留学プログラムの開発ができ、インドではインターンシップ実施の可能性が高まり、学生の海外実習の環境整備が進んだ。特に在ベンガルール日系企業では、本学の学生の受入れ表明があった。さらに、バンガロール大学日本語学部との協議では、今後本学教員の現地での授業、本学学生との

交流方法について具体的な協議ができた。また、チェンナイではマドラス大学との協定締結に向けた具体的な協議をすすめることができた。

後期10～11月

■時期・概要（項目）

- 海外授業経験者発表会の開催

■計画内容

- 海外授業を体験した学生に、その内容を纏めさせ、学内だけでなく、他大学の学生と合同で発表会を実施する。また、企業担当者等にも案内し、多方面から意見聴取する。

■活動実績

- 「多文化インターンシップ」「多文化フィールドスタディー」終了後の成果発表会（作品展示及び説明含む）では、社会人学生等の率直な意見を聴くことにより、学生はそれまでの自分からの脱却を図ることができ、就職活動や学習の仕方に良い変化をもたらした。

後期12月

■時期・概要（項目）

- GGJ EXPO への参加
- 体験型プログラム成果報告書作成（インターンシップ・フィールドワーク）

■計画内容

- GGJ EXPO に参加し、「経済社会の発展を牽引するグローバル人材の育成支援」採択校として、本学のグローバル教育の特徴を高校生、保護者等に理解促進を促す。
- 体験型プログラム（インターンシップ、フィールドワーク）成果報告書を作成し、さらに多くに希望者を募る。

■活動実績

- GGJ イベントにブース出展したことにより、特に高校生、保護者の意識を高めることができた。同時に、採択各大学との意見交換の機会ともなった。
- 学生たちが他大学の教職員や企業人の前で、成果を発表することにより、多くの気づきが生まれ、さらに効果的なプレゼンテーションができるようになった。

後期7～3月

■時期・概要（項目）

- グローバル・ビジネスリテラシーデータ収集

■計画内容

- 在学中に留学、海外インターンシップ・フィールドスタディー、海外ボランティアなど様々な経験をした学生のグローバル・ビジネスリテラシーの成長度を確認する。

■活動実績

- グローバル・ビジネスリテラシーアセスメントデータの収集により、学生たちは留学中の様々な経験を可視化することができ、帰国後の就職活動準備を効率的に進めることができた。また、不足している能力の内容を把握することにより、帰国後の目標設定が以前より容易になった。「アジア夢カレッジ」でのインターンシップについては、受入企業担当者の評価と学生の自己評価を比較することにより、学生は、企業人の考え方を理解でき、企業に必要とされるグローバル人材像を知るとともに、必要な能力を明確にすることができた。データ収集の専門的知識を習得することにより、学生たちは留学期間中に体験した内容等をより深く掘り下げて考えることができ、就職活動の準備の為のデータをより多く蓄積することができた。他方、システムを積極的に活用しない学生の分析、こうした学生への指導の在り方の検討も課題として明らかになった。本学卒業生による講演会は、本システム各項目が社会でどのように評価されているのかを、効果的に明示でき、参加学生の理解度も深まり、就職活動に対し、効率的な誘導が可能となった。

後期2～3月

■時期・概要（項目）

- 実施状況の精査と年次報告書の作成、国内外への情報発信、多言語ホームページ等の更新作業の実施

■計画内容

- 外部からの評価も踏まえ、事業の実施状況を精査し、年次報告書を作成し、本取組の国内外への公表・普及とあわせ、他大学等の成果との比較・検討を行う。

■活動実績

- 成果および問題点の明示的な把握が可能となり、次年度計画の策定に有益であった。これにより今後もグローバル人材育成推進事業の継続が可能となった。また、平成27年度版年次報告書の配布及び多言語ホームページへのニュースの掲載によって、広く国内外に公開し、有益なフィードバックを得ることができた。本事業5年間の総括として、「亜細亜大学グローバル人材育成推進事業成果発表会」を開催し、武蔵野市国際交流委員会理事長、他大学等の外部評価委員から、本学の5年間の取り組みに関し、詳細な数値等に基づいた達成度合い（学生の成長度合い）を発表し、評価を受けたことは、本学の今後のグローバル人材育成事業の具体的施策を明確化することにつながった。また、本成果報告会における学生発表は、高校教員等に対し、本学の取り組みが学生の成長に対し、大きく寄与していることの証左となった。本学の取り組み内容の雑誌等の記事掲出により、

広く国内に発表することができ、本学学生、企業、高校生、保護者等に対し、グローバル人材輩出の重要性を伝えることができた。さらに、本学としては初めての海外拠点事務所（シンガポール）を開設し、東南アジア地域（シンガポール）には、本学学生、教職員が当該地域に派遣された場合の支援、卒業生間の相互連絡・調整等、ヒューマンネットワークの構築を行う環境を整えることができた。

推進本部会活動実績

第11回 (本年度第1回) 期日:平成28年10月11日(火)

<議題>

- 1.平成29年度予算の考え方について
- 2.平成28年度末までの事業内容確認について
- 3.危機管理シミュレーションの実施について
- 4.その他

第12回 期日:平成29年1月10日(火)

<議題>

- 1.平成29年度予算編成について
- 2.平成28年度末までの事業内容確認について
- 3.その他

ワーキンググループ活動実績

第28回 (本年度第1回)期日:平成28年10月11日(火)

<議題>

- 1.平成29年度予算の考え方について
- 2.平成28年度末までの事業内容確認について
- 3.危機管理シミュレーションの実施について
- 4.その他

第29回 期日:平成28年12月16日(金)

<議題>

- 1.平成29年度予算編成について
- 2.平成28年度末までの事業内容確認について
- 3.その他

多文化インターンシップ

■目的

まず、本取り組みは、正規授業科目（前期週一回90分の授業と夏季休暇中の就業体験＝2単位）として多文化コミュニケーション学科に開設されているもので、その「科目の趣旨」は以下の通りである。

科目の趣旨（文科省届出）「本科目は、多文化コミュニケーション学科で習得した「多文化の中で行動する術」を実践しつつ、職業体験を行う実習科目である。事前学習を経て、外国の企業（居住はホームステイ）、または国内の対外部門でおよそ3週間の体験を行う。最終的には、自己評価レポートと雇用者のレポートで評価する。」この実習を含む授業によって将来のグローバル人材としての初歩的経験と知見を大学外の実社会から修得することが主目的である。

■実績

前期15回の授業の中で、履歴書作成、自己分析と自己テーマの深化のための文書作成やプレゼンテーション、実習地の予備調査、実習企業の予備調査、危機管理（海外渡航損害保険業者）、渡航のノウハウの確認、ビジネスマナーの演習（外部専門家）などを行った。夏季実習は、以下の各地で実施した。

シンガポール（シンガポール）7名
（法学部1名含む）
香港（香港）2名
中国（広東省深圳市）2名
中国（上海市）9名
韓国（ソウル特別市）1名

■総括

平成26(2014)年度に開講し、今回は3期目の派遣となった。科目設置後間もないため明確な成果は確認できていないものの以下のような諸点に置いて評価に値する（学生の就業日誌やレポー

トを参照）。

- (1) 学生は本学および留学先で習得した外国語（英語、中国語、韓国語、一部インドネシア語）を実社会、実務の場面で使用する機会を得た。これにより、自己の外国語運用能力（社会的通用性）を実践（応用）面から評価していた。
- (2) 学生は外国語以外の能力（積極性、自発性、適応力など）の必要性を再認識した。
- (3) 学生はグローバル社会でのキャリア形成に関して、現地でのロールモデルを通して再考察する機会を得た。
- (4) 学生はプレゼンテーション、文書作成などに際して、貴重なコンテンツ（海外での就業体験の成功や失敗など）を蓄積できた。
- (5) 大学および学部は現地企業（日系企業の現地拠点）との連携によって新たな教育の機会を開発した。企業からの評価も概ね良好であった。

キャリア意識が不十分なまま参加して、必ずしも当初のテーマを完遂することができなかった学生もいる。このような学生にはさらなる事前の指導が必要となる。また、企業とより効果的な実施内容（カリキュラム）に関する協議も必要となろう。また、すでに実施している危機回避、危機管理方法の（情勢に対応した）一層の強化も必要である。現在の学生評価手法もさらに改善の余地がある。このような点を課題としつつ、今後も現在の方向を維持、継続しつつグローバル化時代のキャリア教育の方法を確立する。

なお、今年度はマレーシア希望者がいなかったが、完全に英語で行うインターンシップの難易度を再考する必要がある。

多文化フィールドスタディー

■目的

「アジア行動力人材」の育成を掲げる多文化コミュニケーション学科において「多文化フィールドスタディー」には、主要学習分野を統合する総合科目としての役割が期待されている。本学科生は1年次から英語、地域言語、文化人類学、社会学等を学ぶことになっているが、本科目では3年次夏に教員引率のもと海外における様々な異文化現場での調査・研究を通じて、それまでの教科学習で得た知見に加え「アジア行動力人材」を構成する以下の能力の涵養を目指している。その能力とは、①課題を選定する力、②自文化と異文化の差異を見極める力、③様々な失敗を克服する力、④獲得した資料を分析する力、⑤大勢の前で堂々を発表できる力、などである。

■実績

各フィールドスタディーの実施内容は以下の通り。具体的内容については、担当者による出張報告参照のこと。

- (1) 中国：共通テーマ「中国大学生の土産物購買行動－訪日観光客向けの新商品開発のために」
調査期間：2016年8月6日から26日
調査地：中国北京市（北京師範大ほか）
参加学生数：10名
- (2) ベトナム：テーマ「ベトナムに来る観光客とそれを支える観光業について」
調査期間：2016年8月17日から24日
調査地：ベトナムホーチミン市
参加学生数：7名

■総括

(1) 成果；2014 年度に開始された本事業も 2016 度は 3 回目を無事実施することが出来た。今年、韓国プログラムが担当者の他大学転出、フィリピンプログラムが参加人数が予定数の達せずを理由に 2 つのプログラムが休止となったが、残る 2 つは経験値を上げ、内容的にもより充実したものとする事が出来た。

(2) 今後の方向性；平成 28 年度は実施プログラムが 2 つに減少したために参加者数も 17 名と、履修学年である 3 年次生の 13%に留まった。夏のフィールドスタディー終了後、秋になって成果報告の機会を従来の 11 月のアジア祭に加え、10 月の 2 年生のガイダンスで設けるなど学生の間への浸透を図った。それが功を奏し、平成 29 年度については参加希望者が韓国 14 名、中国 15 名、ベトナム 6 名、フィリピン 14 名の計 49 名

へと増加するなど履修学年の 40%を占めるまでに復調傾向を示した(注1)。平成 31 年度からはアメリカプログラムの開始も予定されていることから、平成 26 年から 28 年にかけてのフィールドスタディーの実施によって、「多文化フィールドスタディー」は、「多文化コミュニケーション学科」の学びの 3 つの柱である英語並びに地域言語、文化人類学と社会学を中心とした多文化理解、現地体験型学習の 3 者を統括する中核的科目として役割を果たすようになったと言える。

(注1) 5 月に入って大学の方針として、教育研修目的とする韓国渡航が禁止された影響で、「多文化フィールドスタディー(韓国)」は当初予定していたソウルでの実施を中止し、韓国関連のテーマの調査を日本国内で実施することになった。

のぞきみ！多文化きっちゃん

■目的

多文化コミュニケーション学科は、開設から 3 年目、第 1 期生が 3 年生となる 2014 年に学科の開設理念と学生の学習成果を学内外に向けて発信するため場を設けることを決定していた。またこの目的を達成するための時期は、大学最大のイベントであるアジア祭期間中とした。

2014 年、第 1 回目の試みとして「多文化マーケット」を実施した。これは、学科で学ぶ 6 地域、朝鮮半島、中国大陸、東南アジア、南アジア、西アジア、ラテンアメリカの文化をその地域のマーケット(市場)を再現することにより、学生たちにグローバル時代の伝統文化のあり方について高い目的意識をもって考えさせるものであった。その成果と課題を踏まえ、2015 年度は、「グローバル時代における多文化的祝祭」を統一テーマとした「多文化フェス 2015」を実施した。6 地域の祝祭を学生の手作りによる展示物によって表現し、伝統的祝祭と現代的課題について問題提起を行うものであった。また本企画は、学生の主体的関わりと教員の指導の在り方について議論を喚起するため、学科で重視しているアクティブ・ラーニングの試みとして位置づけられた。今年度は、このアクティブ・ラーニングについてさらに議論を深める試みとしてグローバル時代における食文化の多様性を統一テーマとし「のぞきみ！多文化きっちゃん」を実施した。

■実績

今年度は、なるべく早い時期に学生が主体となる実行委員会を設置するため「多文化フェス 2015」終了後すみやかに学科としてアジア祭に参加する意義について学生に伝え実行委員を募った。またアクティブ・ラーニングをさらに進めるため、教員の役割は、あくまでも学生の主体的関わりを補佐、アドバイスすることとし、企画内容、実施方法、学科内の連携はなるべく学生の

主体的判断に委ねることとした。「のぞきみ！多文化きっちゃん」は、6 地域の伝統的食文化を展示紹介するとともに昨年度課題として指摘された来訪者と学生が共に問題意識を高めることを念頭に置き、問いかけ型説明方式を導入するなど新たな試みを行った。また昨年度同様に後期開始とともに 3 年生の合同ゼミを開催し、今年度の企画について趣旨、各地域の展示内容の説明、協力体制の確立などについて確認を行った。

各地域の展示、および発表内容は、次の通りである。中国は、旧正月の料理をテーマとし、円卓をメインに置き、北京ダック、餃子などの料理を紹介した。韓国は、朝鮮王朝時代の家庭料理の配膳をパンサン(飯床)を作成して紹介した。インドネシアは、屋台文化をテーマとし代表的屋台であるカキリマを作成し、サテ、テンペなどを紹介した。インドは、古代インドの食卓を取り上げ、古代のお菓子や石窯を作成した。中東は、千夜一夜物語に登場する料理にスポットあて、現代のケバブやハラールフードについて紹介した。ラテンアメリカは、死者の日に準備される料理また屋台の様子を再現した。さらに来訪者の関心を高め、理解を深める企画として今年度も民族衣装を実際試着できる「いしょうで多文化」、韓国語、ヒンディー語、アラビア語で名前を書いてもらえる「名前で多文化」、ひげの形に見る文化的違いについて考える「おひげで多文化」などの特設コーナーを設けた。食文化に関する発表はもちろんであるが、こうした特設コーナーでも学生の主導的役割を求め、学生の問題意識と学科の理念が来場者に伝わるようにした。

今年度も学科企画広報紙として「多文化便り」を随時発行し学年を超えた学科学生の交流を呼びかけた。また同時期に夏季海外研修報告を実施し、多文化インターンシップ(中国(深圳、東莞、上海)、香港、韓国、シンガポール)と多文化フィー

ルドスタディー（中国、ベトナム）の参加者が発表を行った。学科学生には本報告会への出席を奨励し、グローバル人材としての自覚を持つよう指導した。

■総括

統一テーマであるグローバル時代の食文化の多様性については、アンケートの分析から90%以上の来訪者が理解を深めたことが確認できた。また展示方法と手作りによる展示物のクオリティの高さが評価されたことも本企画の成果であった。また特設コーナーとして準備した韓国語、ヒンディー語、アラビア語で来訪者の名前を書く「名前が多文化」は今年度も大いに人気を集め、地域言語履修生の学習意欲を高めることにつながった。来訪者と共に問題意識を高めるという今年度の課題についても「参加型の展示発表で楽しめた」というアンケートの文言に表れているように学生の意図が来訪者に伝わった展示発表となったと受け止めている。

今年度も本企画終了後、実行委員に対しては本企画の評価、問題提起を求めた。学生からは昨年に比して学生の主体的関わりが進んだという指摘もあれば教員との連携方法についてまだまだ検討の余地があるとの指摘もあったが、全体と

して本企画を実施したことに対する自信が読み取れ、今後の成長に期待を持たせるものであった。

次年度へ向けた課題としては、学年を超えた交流、協力の場としてこの企画をどう継続させるかがある。「多文化便り」や学部ブログを通じて学科の全学年に呼びかけを行っているが、3年生以外の学年からの実行委員への応募者は限られている。この課題を克服するにはゼミや地域言語の授業を通じて学年を超えた人的交流を促進することが必要になるであろう。

今年度も本企画は、武蔵野市国際交流協会（MIA）との共催企画「多文化ミュージアム」の実施につながった。同企画は、平成29年2月6日から7日の2日間、武蔵野プレイスのギャラリーにて開催され、MIAの活動紹介とともに学科は、「のぞきみ！多文化きっちん」の中国、韓国の展示物をメインに据え、第1回目企画「多文化マーケット」の展示物も活用し、「名前が多文化」のイベントも実施した。またインドネシの民族舞踊やモンゴルの馬頭琴演奏の司会役も学生が担当し、広く市民に対してグローバル時代における食文化の多様性について日頃の成果を発表し好評を得た。



グローバル人材成長記録ファイル

■目的

「自己記入型」学習記録ファイルの作成と配布の目的は、学生が学習（科目履修）や社会活動参加を計画し、また、その結果や過程を振り返り、次段階の課題を設定するプロセスを明確に意識し、自己目標を達成することを支援することである。前年度（27年度）に引き続き、この目的に沿って事業を実施した。

■実績

グローバル人材育成を主たる目標とする「国際関係学科」の初年次学生（新入生）に対して自己記入型のファイルを配布する。4年間の大きな目標、および半期（セメスター）ごとの個別目標を意識させ、かつ学習履歴や成績、資格取得などを記載させることによって学習や人間形成などの観点から目標達成度を明確に意識させている。記載項目は、セメスターの大きな目標、GPA（全科目成績を平均化して算出した数量指標）、執筆したレポート、TOEIC®の点数（折れ線グラフの方眼用紙提供）、各種資格の受験状況と合否、読書記録などである。また、穴あけファイル形式なので、返却されたレポートや資格証明などをファイリングすることも可能である。記載状況を必修ゼミの教員がセメスターにつき2回チェックし（教員のサイン記入または捺印）、活用を促進してい

る（前年度同様）。これに加え、前年度の反省に立ち、使用のモチベーションを上げるべく「専門ゼミ」所属選抜の際には、必ず携帯し、希望するゼミ教員にこのファイルを提示し、学習記録を理解してもらうように徹底した（ポートフォリオファイルを持参しない場合は、ゼミ選択において不利となる）。

■総括

学生に大学生生活や学習に対する目標を設定させ、その結果をレビューさせ、それを踏まえた次の課題を明確化させ、効果的な目標達成を支援するためにはこのような「自己記入型」ノートは有効である。バーチャル空間での保管よりも常時携帯し、容易に参照できる。今年度は、利用促進を企図した結果、一部の学生は学習記録として有効な活用ができていた。また、今年度も、学生には概ね好意的に捉えられている。このファイルに記載するメリットを学生も理解しているとみられるが、一部の学生にとって「損得に直結しない」と思われている。したがって記載することへのモチベーションが低くなりがちである。ゼミ選択だけでなく、様々な機会に「教員側も」このファイルを利用することを考えなければならないであろう。

学習成果記録帳

■目的

学習成果記録帳は、多文化コミュニケーション学科開設の理念を具現化する目的で導入されたパスポート型記録ノートである。本学科では、学生に対して「卒業までに海外体験を」をスローガンにアメリカやアジア各地への語学、及び現地体験型学習（フィールドワーク）やインターンシップへの積極的参加を奨励している。こうした海外体験、またそれにつながる国内における日頃の学習及び活動の成果は、きちんと記録され、学生自身による振り返りと評価の対象になることによりはじめて意味をもつものとなる。本記録帳は、学生たちが学科開設の理念を常に意識し、グローバル世界でその実践的コミュニケーション能力を発揮できる人材として将来設計をより具体的なものとするために、また教員が記録帳の確認を通じて学生の学習状況や活動内容を把握し、より有効な指導へつなげていくために作成された。

■実績

学習成果記録帳は、学科の開設理念を象徴するものとして導入時から現在までその体裁をパスポート型とし、また通称を「多文化パスポート」とした。

今年度も新入生全員に1回目のオリエンテーションゼミで配布し、記録帳を携帯する意味についてこれまで通り以下の3点に絞って説明した。

(1) 国境を越えて学習・活動の場を見出すグローバル人材（多文化人）を養成する学科のシンボルとして携帯することにより、大学内での自己のアイデンティティを確立する。(2) 学習・活動成果を記録することにより、大学生活における自己の目標と達成度を確認し、客観的視点から自己評価を行なうとともに次の学習・活動課題に対する問題意識を高める。(3) 就職活動をする際に、この記録を元にして大学生活をまとめ、履歴書作成や自己アピールなどで有効利用できるようにする。

学生は、教員の指導に基づき定期的に、または自らの申告に基づき適宜、語学留学、TOEICのスコアや地域言語（学科に開設されているアジア及び中南米諸言語）の到達目標や成果、また国内外のフィールドワークやインターンシップ、ボランティア活動、その他学科が必要と認めた学習及び活動成果に対してシールを貼り、記録として保存した。

シールは主に言語・現地体験型学習系（TOEICや英検、地域言語、留学、海外フィールドワークやインターンシップ、等の成果を示すもの）と活

動系（学内外の多文化やグローバル活動等の成果を示すもの）と授業系（授業内で扱う多文化、グローバル人材、将来設計学習等の成果を示すもの）に大別されるが、内容とレベルに応じて得点を定めている。通常、言語・現地体験型学習系と活動系は授業系のものよりも高い得点とし、学生の言語学習、留学、国内外での活動への積極的な関わりを促すことを目指している。

学生の学習・活動の場が広がるにつれて、必要に応じ、学科会議において新たなシールの作成の必要性について、また評価対象としての是非について検討している。昨年度は、海外ゼミ合宿参加や学内長期ボランティア活動などが評価の対象に追加されたが、今年度は、私費留学や洋上大学、地域言語の検定制度合格者などが新たな評価対象となりそれぞれ得点が認められた。

昨年に引き続き、今年度もシールに基づき4年間の得点を集計し、卒業式の場で多文化アクティブ大賞として、3部門別（大賞：シールの総得点数、上位3名、フットワーク賞：シールの総枚数、上位1名、プロジェクト賞：現地体験型学習・活動のシール総枚数、上位1名）に表彰をおこなった。

また今年度も3年次生を対象に前期期間中に一度得点を集計し、中間発表として高得点者と上記3部門別の具体的な成果内容を公表し、卒業時までさらに充実した学習・活動成果を目指して努力するよう促した。

■総括

英語および TOEIC®

■目的

(1) 前期中に4年生を対象として TOEIC®700点を目指す中級の講座と、600点を目指す初級の講座を開設し、これまでと異なり、ほぼ個別指導に近い形で、英語能力を測定し、かつ弱点克服により、明確な成果を出すことを目指した。また、夏季に海外インターンシップ参加予定の3年生もこの対象に加え、英語力強化を図った。なお昨年度まで実施した一年生を対象とする上級学生による英語チュータリングについては、本年度は実施せず、授業における基礎的な英語文法力向上に重点をおいた。

(2) 後期は、グローバル人材育成における英語教育のいわば総仕上げとして、単純な TOEIC®指導のみではなく、英語での電話応答、メール発信等、いわゆるビジネス英語の指導を組み込み、ネイティブ講師のもとで、より実際の英語力強化を目指した。

■実績

(1) 前期中は「TOEIC®プレミアム講座」と称して、700点を目指す「プレミアムコース」（ベルリツ委嘱）と600点を目指す「セミプレミアムコース」（キャリアビスタ委嘱）を開講した。プレミアムコースは、模擬試験2回＋個別カ

昨年卒業時の表彰制度について3年次の段階で学生たちに周知したことは、記録帳の有効活用必要性について考えさせる上で大きな意味があったと考えられる。今年度の3部門別の内訳は、大賞が、103点、95点、91点（昨年は、99点、90点、80点）の3名、フットワーク賞が、25枚（昨年は、43枚）で1名、プロジェクト賞が、7枚（昨年は、6枚）で1名であった。昨年度の第1期生の成果と比べるとフットワーク賞（シールの総枚数）が落ち込んだものの、他の2部門については昨年度を上回り、学生たちの記録帳に対する活用意識が地味ながらも維持されていると言っておりよいであろう。

昨年指摘された学生の記録帳に対する活用意識の違いについては、1年次から機会を見てこの記録帳を携帯する意味について地道に説明してきた。同様に、昨年度課題として指摘されていた評価対象となる項目（学習・活動）の明確化については、評価対象となる活動について、特に1年次の学習・活動についてあらかじめ項目を印字しておくことも提案され、これは次年度、記録帳の改定版として作成することとなった。

学生が記録帳作成の意図を学科での学習・活動を通して理解し、それを次のステップを考えるうえでどう活用していくか、今後も地道な説明と奨励が必要である。また学生自身による記録帳の評価、活用方法に関する検討も必要であり、これは次年度の課題となる。

ウンセリング2回＋特別授業2回という密度の濃い内容を組み込み、20名の参加があった。だが、就職活動等のため、最終的には13名の参加となった。このうち得点上昇者は4名（31%）であり、上昇点平均は33点であった。一方セミプレミアムコースは、日本人講師の指導のもと、英文（小説）を読み、英語での要約を行うという地味であるが着実な指導を10回行った。参加者は7名であったが得点上昇者は3名（43%）であり、上昇点平均は60点であった。

(2) 後期はビジネス英語を軸として4つのクラスを設け、全12回の指導を行った。参加者数と得点上昇は下記表の通りである。

	受講者数	初期平均	上昇者数	割合	上昇点平均
初級	15	530	8	53%	89
中級水曜	13	587	4	31%	55
中級木曜	14	637	5	36%	54
上級	16	814	7	44%	25

■総括

昨年度よりの課題は、受講者数の減少傾向に歯止めをかけること、また600点突破以降の学習モチベーションの維持、さらに1-2年次での TOEIC®得点の飛躍的な伸びと3-4年次での停滞ギャップの克服であった。このうちモチベーション問題は、現行カリキュラムの枠内では解決

困難である。このため、本年度は主に3-4年次での700点突破という課題に焦点をあてた。

結果として、上記の通り、それなりの得点上昇があり、終了後アンケートでも、講座参加者のほぼ8割が英語力向上を実感した回答するなど、一定の成果をあげることができた。しかしながら、卒業年次学生全員を見た場合、「2割の壁」(700点超え)および「5割の壁」(600点超え)があり、これを突破すること出来なかった。4年半のグローバル人材育成事業において、複数(5社)の業者、多様な指導方法(TOEIC®問題集中心、ビジネス英語中心、リーディング要約中心、模擬

テスト中心など)を試みたが、決定的な差異は見いだせなかった。実際、500点台では比較的伸びが大きいのが、600点を超えると伸びがかなり鈍化してくるという傾向が顕著であった。また正規授業ではないゆえ、強制(単位)もなく、辞退者や欠席者を防ぐ方法を見いだせなかった。

これを乗り越えるには、おそらく、よりドラスティクな方法——たとえば留年者増加を覚悟して600点を絶対卒業要件とする、あるいは英語重視のコースを作り、そこで指導を強化するとともに700点を絶対卒業要件とする等々——が必要となるであろう。

地域言語

■目的

「多文化コミュニケーション学科」において地域言語は、英語と並ぶカリキュラム体系上のコアとして位置付けられている。英語については在学中5回のTOEIC®受験の義務化のように、学科開始時には既に学習成果の経年観察を可能とするシステムが整備されていた。他方で、地域言語は、1年次に初級を週3コマ受講したのち、7-8割の学生は2年次アメリカに留学し、その後1年間のブランクを経て3年次になって中級として地域言語の学習を再開するなど、語学学習上、英語以上に指導上の難しさを抱えている。このため学科開設以来、学生の学習に対するモチベーションを維持・向上させる工夫が求められていた。この課題に対処するため、平成28年度も検定制度が整備されている4言語については、前年同様、検定試験の受験料補助等、以下5(実施内容/実績)に見る対応を行った。

■実績

1. チューター

昨年度に続きインドネシア語の授業では留学生をチューターとした支援を実施した。中級の授業では、前期7回、後期7回の合計14回、インドネシア人留学生2人にチューターとして参加してもらい、前期は主に日本人学生のインドネシア語会話の練習相手、後期は日本人学生の書いたインドネシア語作文を修正、適切な文章で表現するためのアドバイザーとなってもらった。また、留学生には必要に応じてインドネシアの社会や文化について日本人学生に語ってもらい、高校生を迎えてのインドネシア語授業でも彼らに中心的な役割を果たしてもらった等、授業を盛り上げる役割を担ってもらった。

2. 検定料補助(言語別)

(1) 実施内容

・韓国語(韓国語能力試験)(2016年10月実施)

受験者27名(内訳 上級(6、5級)2名、中級(4、3級)18名)

合格者9名(内訳 5級2名、4級4名、3級3名)

・中国語(中国語検定)(2016年(6月、11月)、2017年3月実施)

受験者14名(内訳 3級11名、2級3名)

合格者4名(内訳 3級3名、2級1名)

・インドネシア語(2016年7月、2017年1月実施)

受験者28名

(A級2名、B級2名、C級9名、D級8名、E級7名)

合格者12名

(A級1名、B級1名、C級2名、D級2名、E級6名)

・スペイン語(スペイン語検定)(2016年6月、11月実施)

受験者4名(4級1名、5級2名、6級1名)

合格者3名(5級2名、6級1名)

(2) 実績(2016年度到達目標級以上の級の合格者)

韓国語9名、中国語4名、インドネシア語2名
※到達度目標:韓国語(韓国語能力試験3級)、中国語(中国語検定3級(但し、「アジア夢カレッジ」2級)、インドネシア語(インドネシア語検定B級、スペイン語(スペイン語検定4級)

■総括

(1) 成果;合格者は平成28年度15名となり、うち韓国語は9名と合格者の60%を占めた。韓国語については平成26年度3名、平成27年度4名、そして平成28年には9名になるなど本事業の最終年度になり教師陣の努力が顕著な成果として現れた。他方、中国語は平成26年度8名、平成27年度6名、最終年度である平成28年度は4名と減少した。インドネシア語はチューター制度の導入もあって、平成27年度に初の合格者を出し、平成28年度にはそれが2名に増えるなど着実に成果を出している。

このように各言語間における合格者の相違を生み出す原因については、今後の慎重に検討してゆく必要があるが、「多文化コミュニケーション学

科」がスタートし、現在に至る5年間を見る限り、①地域言語（初級）の受講者数（注1）、②各言語別のAUA P参加率の相違（注2）、経験値としてこの2点の影響を受けて来たように感じている。①については初級履修者が多い言語は、当該言語履修者が受験学年である3年次になると合格者が増える傾向にある。このため中国語については当初4言語中最も多い30名の履修者を想定していたのが、日中関係の影響を受け、5年間の平均で23名と4言語のうち初級履修者は3位に留まった。一方、韓国語は当初20名を想定していたのが、逆にこの5年間の平均は28名と一貫して高い履修者数を維持した。②に関しては、韓国語の場合、AUA P参加率が80%から48%（平成26年、28年入学者）へと低下するなど、履修者の間で関心の英語から韓国語へのシフトがおきている一方、韓国語とならんで履修者が27名と多いスペイン語について、同率は78%から69%と従来通り高く、韓国語のようにシフトはおきていない。

以上を総括すると、①履修者が多く、AUA P参加率が低下し（すなわち韓国語学習に専念できる）韓国語で合格者が増え、他方、履修者が少なく、AUA P参加率が73%（平成28年度）と高い中国語では平成25年、26年のように履修者が少なかった学年が受験学年を迎えるにつれ合格者が減少する傾向が観察された。②履修者が多い一方

でAUA P参加率が高いスペイン語においては、英語学習との両立の難しさから合格者を出し難くなっている。このように英語以外の外国語については、改めて国際環境と英語学習という2つの要因の影響を受けやすい構造を、この5年間の経験は明らかにしたと言えよう。

注1 韓国語 30名、28名、26名、28名、27名（平成24年から28年入学生）、中国語 31名、14名、19名、26名、26名（同）、インドネシア語 28名、27名、24名、11名、19名（同）、スペイン語 25名、30名、30名、26名、25名（同）
注2 韓国語 80%、75%、48%、中国語 89%、83%、73%、インドネシア語 76%、100%、52%、スペイン語 78%、85%、69%（平成26年、27年、28年各入学年）

（2）今後の方向性
今年の合格者のデータが示しているように、地域言語に加え「多文化フィールドスタディー」「同インターンシップ」、AUEPなど各種アクティブラーニングが整備されている言語については、外国語学部で当該言語を専攻する学生と同等かそれ以上の成果を収めることが可能であることが証明された。今後はすべての言語において、各言語に条件に合せ可能な限りこうした支援の仕組みを整備して行くことが求められよう。

キャリア支援

■目的

グローバル人材育成において不可欠なキャリア教育推進のために、昨年度に引き続き、専門家（キャリアカウンセラー）の支援を受けて、低学年向けには、入学直後からのキャリア形成の考え方を指導し、将来の海外体験・就業活動への姿勢を養う。また海外留学経験者（3年生）向けについても、昨年同様、「グローバルエアライン課外講座」を実施し、エアライン領域をはじめとする国内外グローバル企業の事業内容、求められる人材について指導し、あわせて実務的な能力育成を目指す。

■実績

1年生向けのキャリア教育実践として、本年度は正規専門科目として「アクティブ・キャリア入門Ⅰ（前期）・Ⅱ（後期）」を開講し、全般的な枠組み運営と成績管理を専任教員が行い、内容指導補助をキャリアカウンセラーが行うという方式で授業を実施した。前期40名、後期48名が参加し、ほぼ毎回のグループワーク、および特別授業としての社会人交流会等を通して、グローバル・キャリア意識の形成を図った。とくに本学独自の「グローバル人材育成入試」の入学者（3年次に海外インターンシップに参加予定）9名にはこの科目の履修を義務づけた。前期履修者のうち38名が後期も履修を継続し、全体出席率が95%

を超えるなど、学生の熱心な関与は明白であった。また東京商工会議所が主催した夏季企業見学（都内学生延べ370名参加）に、本科目履修者25名（延べ57名）が参加するなどの積極性が生まれた。

一方、3年生（女子学生）を対象とする「エアライン講座」については、昨年度同様、前期中に説明会を複数回開催し、書類選考と面接を経て、最終的に2クラス（火曜及び木曜）計20名の受講者を選抜した。昨年度は実質的に10月開講であったが本年度は6月開講とし、夏休み前に2回、秋に8回の講座を実施した。さらに1月22日、2月26日、3月19日（いずれも日曜日）には、昨年同様、一日セミナーを行った。セミナーでは、昨年度の講座受講者ですでにエアライン各社に内定を決めた先輩学生も加わり、グローバル競争の中での企業、とくにエアライン関連企業の現状、そこで必要とされる能力、またコミュニケーション力全般の育成を図った。

■総括

1年生向け「アクティブ・キャリア入門」については、昨年度の懸案であった出席者減傾向については、正規科目とすることで克服することができた。この科目を受講した学生から、新入生向けのオリエンテーション行事に先輩補助学生として参加する者が複数出現するなど、活発な活動意欲は授業終了後も持続されている。

一方、「グローバルエアライン講座」では、昨年度同様、毎週一回3時間というハードな内容にもかかわらず、学生たちが継続的に参加し、そのなかでコミュニケーション力やマナーなどを飛躍的に向上させた。昨年度よりも、目的意識の高い学生の参加がみられたが、冬季、インフルエンザの影響等もあり、やや出席率が低下した。とはいえ、毎週スーツ姿で放課後の講座に取り組む彼らの存在が、他の学生たちにも良い刺激となった

ことは間違いなく、それが国際関係学部学生の就職率の向上にもつながっているものと思える。

むろん、学部の多数の学生に、グローバル・キャリアを意識させながら、充実した学生生活を送らせるという課題は一朝一夕に実現されるものではない。事業終了後もこの課題を遂行するために、学部としてキャリア教育専門の特任教員を採用することとなった。今後通常の授業とキャリア教育とを有機的に結び付けつつ、グローバル人材育成を図っていく必要があるだろう。

危機管理セミナー

■目的

現在、世界各国で重大事件、事故、災害等が発生していることを受け、リスクマネジメント体制の強化を図る。とりわけ、専門家を招き、教職員を対象として、主にメディア対応に主眼をおいた研修を実施するため。

■実績

危機管理専門企業(SOMPO リスクアマネジメント株式会社)コンサルタントによる危機発生時の広報対応の基礎知識に関する概説のあと、元新聞記者である講師よりメディア側からのポイントの解説があり、その後、ある危機事象が発生したという状況下で、対応のあり方をワークショップ形式で教職員が実習できる機会を設けた。

講師：SOMPO リスクマネジメント株式会社

ERM 事業部 竹腰 宏 氏、ほか講師 2名

出席者：学長、副学長 2名、教員 9名、事務職員 28名 (計 40名)

内容：

①本セミナー趣旨説明 (栗田 充治 学長)

②講義 1：緊急時のマスコミ対応に関する基礎知識

講義 2：メディアとどう向き合うか？～社会部記者の経験から～

グループワーク：想定シナリオに基づく対応策の検討と発表

③情報共有/意見交換

④全体講評(本事業構想責任者 栗原 孝 教授)

■総括

①本日の研修は、平成 24 年度に採択された文部科学省(いわゆる)「グローバル人材育成事業」の一環として、主に海外研修における危機管理体制を強化する目的で行って来た。採択の翌年度には、危機管理マニュアル及び学生用危機管理ガイドブックを作成した。平成 26 年度には、国際関

係学部を中心に、関連部署で危機管理シミュレーションを実施した。平成 27 年度は、基本に立ち返って、危機管理の基礎を考える研修を実施し、そして平成 28 年度は、栗原構想責任者の考えのもと、大学全体で取り組む形とした。

②学長、副学長をはじめ、学部長、各事務部署の部課長など、計 40 名が参加した。

③序盤では危機発生時のメディア対応の重要性、特に報道されたことが事実となること、ソーシャルメディアの台頭により“一億総ジャーナリスト”化する点が強調された。対応を誤れば、風評被害、信用失墜など大学にとって甚大なマイナス要因となる。そのうえで、メディア対応の基本(平素からの準備、広報対応の判断基準、初動対応、情報発信の原則など)についてレクチャーを受けた。

④中盤では、元新聞記者によるポイント(トップが会見することを望む、最低限 5W1H に関する事実関係を明確に伝える、記事に信憑性を持たせるため個人情報の開示を求める、優秀な記者ほど横暴に見えるが誠実な対応をすることでその経験が大学にとって財産となることなど)が説明された。

⑤終盤は、2 つのケーススタディーに取り組んだ。学生が不祥事を起こした想定及び学生が合宿中に死亡したケースであり、グループ毎にそれぞれ適切な初動対応及び広報対応についてディスカッションを行った。

大学を含めた教育機関は、どちらかという世間と隔絶していて閉鎖的というイメージがあり、より厳しい目で見られる。今回の広報対応に関する研修をきっかけに、最も重要である学生の安全を最優先に不祥事や事件・事故を未然に防ぐため、教職員の意識と知識の向上につなげるべきと強く感じた。

学習支援環境整備

■目的

(1) 2015 年 4 月にオープンした Asia Plaza (ラーニングコモンズ) で、英語を中心とした語学やキャリアに関して学生たちが主体的に学ぶ

ことのできる環境創出のため、専門家とのコンサルティングを開始した。

(2) 具体的には、11 月に本事業「東日本第二ブロックイベント」として開催される学生による英

語プレゼンテーション大会を好機ととられ、学生に対して、その大会本選出場を目標として自らの発信力を伸ばす取組みを行った。

■実績

ラーニングコモンズ等の学内学習環境を活用し、英語プレゼンテーション大会への準備を以下のプロセスで遂行した。

対象：全学の学生（ゼミ単位、サークル単位、授業クラス単位、その他を想定）

募集方法：授業などでのアナウンスのほか、全学メールで募集案内を配信した。

応募チーム：国際関係学部 3 チーム

プロセス：夏期休暇前に 3 チームと顔合わせ、趣旨説明・アイディアの検討に関する指導があった。その後、1 チームが辞退。8 月下旬から 2 チームを対象に、外部アドバイザーとして（株）丸善の指導が始まった。また、英語表現に関しては、本学英語教育センターのネイティブ教員による指導を行った。

学内予選：9 月下旬学内最終予選の結果、1 チームが選ばれた。

大学間予選：選抜された 1 チームに対して、さらに強化指導を行った。10 月大学間の予選が中央大学で行われた。予選通過。

本選：11 月 23 日、早稲田大学において、本選が行われ、本学代表チームが準優勝となった。

その後、これまでの経験を形に残し、今後の学生指導に活かすため、学生用のガイドブックと教職員用の指導マニュアルを作成した。

■総括

ラーニングコモンズという学習環境を以下に効果的に学生指導に活かせるかという問いに対

して、昨年に引き続き明確な目的と目標をもって取り組んだ結果、英語プレゼンテーション大会で準優勝という結果を導き出すことができた。これは特定の学生たちにとっても自信につながる良い経験になったことは言うまでもなく、それ以上に大学として、そして学生指導に関わる教職員として成功につながるノウハウを蓄積することができ、大変貴重な経験となった。

専門家によるコンサルティングでは、コンセプトの重要性や主張に対して論拠が説得に足るのか、提案のフォーカスした問題提起（問い）が聴衆の興味関心が高いか、独自性がある提案（答え）となっているかなど、コンテンツのクオリティが上がるよう助言があった。さらに、有効なスライドの作成方法や効果的に聴衆にメッセージを伝える技法など、綿密な指導が提供された。

英語の面では、英語教育センターネイティブ教員に発音や表現方法等について、マンツーマンで受けることで理解度や意識向上につながった。年度末に作成したガイドブックとマニュアルは、今後授業や学外で行われるプレゼンテーションを想定し、準備のプロセスを順序立てし、わかりやすい構成とした。さらに実際に指導の様子を撮影したビデオを編集し、動画リストを添えることで、臨場感に富んだツールとなっている。

これまで専門家が関わり、ノウハウを得たが、今後は学内の通常の指導体制でどうよの支援体制を組み、結果を出し続けることが問われると考える。目指すゴールがあつてこそ、学生の意欲が向上し、学習環境の存在意義もそこで初めて生まれることが確認できた。

海外留学フェア

■目的

新入生と在生に対して、本学の留学プログラムを紹介し留学参加者の増加を図るため、平成 28 年 4 月 14 日から 5 月 20 日の期間に海外留学フェアを開催した。

■実績

(1) 留学促進グッズの作成
留学参加者の増加や国際交流会館ラウンジの利用率増加を図るため、以下のグッズ等を作成し、留学説明会に参加した学生等に配布した。

◎留学促進グッズークリアファイル、携帯スティックハサミ、ペンケース&ノートセット
◎国際交流会館ラウンジ及び学内に設置一のぼり、ラウンジステージ幕

(2) 留学説明会の実施
亜細亜大学の留学制度であるアメリカプログラム(AUAP)、グローバルプログラム(AUGP)、交換・派遣留学生制度(AUEP)や提携する外部機関の説明会を行った。アメリカプログラム

(AUAP)では、4月14日から5月20日まで「AUAP Friday」と題して毎週金曜日の昼休み

に4回に渡ってAUAPの留学イベントを開催した。留学先の一つであるサンディエゴ州立大学からゲストスピーカーを招いての講演や経験者による授業・留学生活についてのプレゼンテーション等を行い、合計252名の学生が参加した。グローバルプログラム(AUGP)では、イギリス、オーストラリア、韓国、中国、マレーシア等留学先別の説明会や留学経験者によるプレゼンテーション等を13回行い、合計291名の学生が参加した。その他実施した交換留学、海外インターシップ、海外ボランティアプログラム等の説明会を合わせて、留学フェア期間中に665名(前年度比108名増)の学生が参加した。

(3) 留学相談ブースの設置
国際交流会館ラウンジ内に留学相談ブースを設置し、留学先に関する情報・資料の展示や留学経験者による留学相談の受け付けの場とした。

■総括

<成果>

今度のフェア全体の参加者数は 665 名（前年比 108 名）と増加し、AUAP、AUGP でも、ほぼ前年度並みの留学参加者を集めることができた。

<課題>

留学説明会への参加者数は増加したが、依然として在学生数の 10%未満であり、年間を通じて留

学プログラムや募集説明会の認知度を上げる取り組みが必要である。来年度に向けては、留学フェアのオープニングイベントとして新入生が語学担当教員や留学生と交流できる交流会兼募集説明会の機会を検討する。



留学フェアでの様子

ホームページ（G 人材専用/多言語サイト等）からの情報発信

■目的

「行動力あるグローバル人材の育成」推進事業に関する、取り組みと実行状況を概括するページを更新した。また、日本留学を検討する海外在住者、あるいは大学進学を希望する日本に在住する外国人留学希望者に対する積極的な情報提供と、その結果による就学意欲の高い留学希望者の入学を目的として、本学の学部学科構成等の基本情報をはじめ、留学生の受け入れ、国際交流に関する現況、ニュースなどを英語、中国語、韓国語で発信した。

■実績

(1) グローバル人材育成に関するページ

平成 25 年度から「行動力あるグローバル人材の育成」推進事業に関する、取り組みと実行状況

を概括し紹介するページを開設し、情報を発信してきた。平成 28 年度(2016/04/01～2017/03/31)のアクセス状況は、4,762 セッションであった。ページビュー8,139 の内、インデックスページに次いで参照の多かったのは、海外インターンシップのページであった。インデックスページでは 3 番目に配置したが、行動フローでも、インデックスからインターンシップへの移動が最も多く、語学力やキャリア支援に比べ、高い関心が寄せられた内容であったことが伺える。

(2) 他言語サイト

情報発信内容は、入学、卒業などの学事、国際交流に関する行事紹介、留学生の受け入れなどに関して英語、中国語、韓国語それぞれで 35 件のニュースを発信した。

これらサイトへの平成 28 年度(2016/04/01～2017/03/31) のアクセス概況は、次の通りである。

	平成 28 年度				平成 27 年度			
	ページビュー		訪問者数		ページビュー		訪問者数	
	/	/news/	/	/news/	/	/news/	/	/news/
英語	53,079	2,228	40,016	1,922	54,976	511	42,340	415
中国語	20,552	1,411	14,967	1,270	19,405	200	15,559	168
韓国語	6,703	1,202	5,152	1,134	5,064	66	3,880	63

他言語サイトの訪問者数は、亜細亜大学全体のサイトのおよそ 1.5%弱で差年並みであった。

なお、平成 27 年度の本学サイト全体へのセッション数は総数 1,681,986 である。その内、アクセス上位は、米国 8,931 (0.53%)、中国 6,663(0.40%)、韓国 2,857(0.17%)、台湾 2,426(0.14%)、ベトナム 2,010 (0.12%)である。この他として、インドネシア、タイ、香港から 1,000 以上のセッションがある。ベトナムのセッション数が 1,028 から倍近く増加している。

■総括

(1) グローバル人材育成に関するページ

事業に関する取り組みは、固定的内容として年度毎に適宜更新し、また都度のトピックについてはニュースとしてページ内に掲出し実行状況に

つき情報の発信を心がけた。8,139 のページビューの内、約 12%の 979 件は、ニュースの参照であり今後も引き続き、具体的な情報発信を継続したい。

(2) 他言語サイト

多言語でのウェブページは、英語以外は増加している。特に、韓国語ページの参照が昨年に比較し 132%となった。今後ともサイト内情報の定期更新と、英中韓によるニュース配信を継続し、参照ニーズに応えるよう継続したい。一方で、英語、中国語に比較して参照の少ない韓国語の情報更新については、今後の課題としたい。

事務職員研修

■目的

グローバル化する社会の要請に応え、事務職員の国際教育支援に関わる能力向上を主な目的として「海外視察研修」を実施した。なお、事務職員の語学力に関して TOEIC®スコア 700 点以上を有する職員数を毎年、数名ずつ計画的に増やすことを数値目標としている。

■実績

本研修は、協定大学の視察を通して、留学制度や現地での生活に関する理解を深め、受験生や在学生に対する様々な留学相談業務を担える職員を養成することを目的としている。本研修は入職 10 年目以内で TOEIC®スコア 500 点以下の職員を主な対象とし、平成 28 年度は職員 4 名（管財課 1 名、大学院事務課 1 名、学生生活課 1 名、総務課 1 名）をイースタンワシントン大学（アメリカ・ワシントン州）に派遣した。約 1 週間の研修を通して、参加者は留学制度や現地での生活について理解を深めると共に、現地職員との交流を通して国際教育への理解を深めることができた。

■総括

平成 28 年度が「グローバル人材育成支援」事業の 5 年目となる。今年度は、海外視察研修を実施し 4 名の職員を協定校に派遣した。現地の生活や授業を実際に見ることで留学に関する見聞を

広げることができた。また、アメリカの大学との教育や学生支援に対する考え方の違いに触れ意見交換する貴重な機会にもなった。これまでの 5 年間、海外視察研修等により 12 名の職員を海外に派遣したが、国際教育を支える人材育成の仕組みが整備されただけでなく事務組織全体の国際理解の向上に役立っている。

課題としては、希望しているものの業務の都合で研修制度を利用できない職員が少なからずいた。実際、平成 28 年度においても TOEIC®対策講座の英語研修を企画し参加者を募ったが、多忙のため十分な参加者が集まらず開講することができなかった。研修内容、実施方法、スケジュール等を再検討すると共に、語学力・国際理解の向上に積極的に取り組む職員が研修制度を活用しやすい職場の雰囲気づくりが同時に必要である。

今後の方向性については、本学の特色である国際教育ならびに留学制度を支える人材育成を継続していく必要がある。これまで TOEIC®スコア 700 点以上を有する職員数を 13 名（平成 24 年度）から 17 名（平成 28 年度）に 4 名増やすことができた。今後も、「グローバル人材育成支援」事業により整備された研修制度を発展させ、国際教育に資する人材育成に注力していく予定である。

海外出張報告

多文化インターンシップ

シンガポール(8月)

- 訪問先国……シンガポール
- 出張期間……平成28年8月5日～8月10日
- 出張者……国際関係学部講師 荒井将志、
国際交流課調査役 寺尾浩一
- 主な目的……参加学生の引率、現地事情の学習指導、その他インターンシップ始動までの必要事項の指導

●行動日程 (現地)

日時	訪問先・対応者等	概要
8月5日(金)	移動	成田・シンガポール (学生同行)
8月6日(土)	シンガポール市内視察と生活上の注意等の確認	公共交通等を利用しつつ、市内視察を行い、買い物等で気をつけることを説明し、通勤手段を確認する
8月7日(日)	午前 シンガポールの歴史等フィールドワーク 午後 各企業への通勤シミュレーション	・シンガポールの歴史に関し、博物館等を利用しながら、フィールドワークを行う ・宿舎から各社への通勤シュミレーションを行い、公共手段の乗り継ぎ時間等詳細事項を確認する
8月8日(月)	Media Japan 社 Compass Holding 社 Tree Islands 社	・インターンシップ学生受け入れに関する事務詳細事項(残業、疾病時、出張、事後評価方法等)確認 ・インターンシップ学生の大学での様子等を含め詳細を紹介 ・インターンシップ受け入れ企業からの要望確認
8月9日(火)	Prestige International 社 NNA Singapore	・インターンシップ学生受け入れに関する事務詳細事項(残業、疾病時、出張、事後評価方法等)確認 ・インターンシップ学生の大学での様子等を含め詳細を紹介 ・インターンシップ受け入れ企業からの要望確認
8月10日(水)	シンガポール空港発 成田空港着	

●総括

- ①シンガポールでのインターンシップ実施3年目であり、受け入れ企業側の体制も慣れてきており、インターンシッププログラム内容もより充実していた。各企業担当者は初日から、学生に対して指示を与え、学生が困れば、その対応をするというサイクルが確りとしていた。
- ②シンガポールは観光地としては有名だが、その歴史をある程度知っている学生は殆どいない。学生たちはシンガポールの若い世代と一緒に業務体験をするので、日本人学生は歴史をある程度理解したうえで、本インターンシップに望

むべきである。これも事前研修プログラムに加えるべき出ると考える。

- ③2年次に米国留学をしている学生が殆どで、英語で理解することに問題が無いため、市内視察等で公共の交通機関にはすぐに慣れていた。

中国 (8月)

- 訪問先国……中国・香港
- 出張期間……平成 28 年 8 月 6 日～8 月 9 日
- 出張者……国際関係学部教授 新井敬夫
- 主な目的……多文化インターンシップ実施に伴う学生同行、及びインターンシップ受入企業との打合せのため

●行動日程 (現地)

日時	訪問先・対応者等	概要
8月6日(土)	東京・香港移動 香港市内	宿舎入居後、受け入れ企業までの通勤経路確認(実地で)、交通カード購入など
8月7日(日)	香港市内ネイザンロード周辺 香港市内セントラル周辺	宿舎周辺生活圏の確認 香港のビジネス街、金融街視察
8月8日(月)	香港市内、受け入れ企業	South Ocean Groupにて。 同社担当者とのインターンシップの打ち合わせ、学生紹介、事業所内部見学、IDカード作成、インターンシップ開始までの随行、指導
8月9日(火)	香港-東京移動	帰国

●総括

- ①日本出発からインターンシップ開始まで、移動、宿舎入居、生活開始、通勤経路の確認、インターン生受け入れ企業担当者へのリレー(打ち合わせ)など行った。
 - ②休日には、学生とともに生活環境の確認と危機管理上の留意点の確認を行った。また、学生と
- 香港のビジネス地区(香港上海銀行、香港政府など)を視察しながら、現在の経済やビジネスに関する知見を深めた(教えた)。
- ③以上により、学生の円滑なインターンシップ開始をサポート、指導した。あわせて、次年度の打ち合わせも行った。

マレーシア・ シンガポール(8~9月) AUGP含む

- 訪問先国……マレーシア・シンガポール
- 出張期間……平成 28 年 8 月 24 日～9 月 7 日
- 出張者……国際関係学部教授 新井敬夫、
国際交流課主事補 富田祐香
- 主な目的……①多文化インターンシップ実施に伴う学生同行及びインターンシップ受入企業との打合せのため
②AUGP マレーシアの企業訪問同行及び UCSI 大学との協議のため

●行動日程 (現地)

日時	訪問先・対応者等	概要
8月24日(水)	移動	成田-クアラルンプール
8月25日(木)	午前 UCSI 大学訪問 午後 AUGP 企業訪問同行	AUGP 担当プログラムディレクターとの面会 マレーシア日本通運
8月26日(金)	午前 UCSI 大学訪問 午後 AUGP 企業訪問同行	学部関係者との面会 エプソン プレシジョン マレーシア
8月27日(土)	UCSI 大学および学生研修旅行(マラッカ) 同行指導 富田帰国	UCSI 大学集合後、学生とともにバスにてマラッカへ研修旅行を行う。途中でバームオイルプランテーションやマレーシア経済の解説を行い、マラッカでは貿易や人的交流(華僑の文化など)の学習
8月28日(日)	クアラルンプール	学生の生活圏、危機管理上の留意点調査 クアラルンプール中心街ブキッピンタン地区視察

8月29日(月)	マラヤ大学視察 (クアラルンプール郊外)	交換留学先マラヤ大学視察、学生生活関連施設、書店、購買所など
8月30日(火)	マレーシア-シンガポール移動	クアラルンプールより長距離バスにてシンガポールに移動
8月31日(水)	シンガポール Media Japan 社 Prestage International 社	インターンシップの今年度の状況と次年度の打ち合わせ インターンシップの今年度の状況と次年度の打ち合わせ
9月1日(木)	Compass Holdings 社 NNA 社 (シンガポール) シンガポール国立大学	インターンシップの今年度の状況と次年度の打ち合わせ インターンシップの今年度の状況と次年度の打ち合わせ 学生関連施設視察
9月2日(金)	シンガポール-マレーシア移動 クアラルンプール市内	バスにてクアラルンプールに移動 マラヤ大学留学中の学生と面談・指導
9月3日(土)	クアラルンプール市内	学生生活圏、危機管理上の留意点視察 ペトロナスツインタワー周辺地区 ジャランスルタンイスマイル通り周辺、ホテル集中地区周辺
9月4日(日)	クアラルンプール市内	学生生活圏危機管理上の留意点視察 ジャランインビ周辺ショッピング地区
9月5日(月)	クアラルンプール市内	学生の実地研修先の検討、資料収集 中央銀行からセランゴールクラブ、独立広場、旧植民地施設、チャイナタウン(中国寺院、インド系寺院)周辺
9月6日(火)	マレーシア出国	
9月7日(水)	帰国	

●総括

- ①シンガポールでの多文化インターンシップに関してインターン生受け入れ企業担当者と会談し、これまでの状況と今後の課題を確認した。
- ②マレーシア AUGP に関して、UCSI 大学の施設を視察し、担当者との会談で今後の課題を議論した。特に、学生の日本出発前の学習態度、意欲、動機の改善を図ることを検討課題とする。さらに、留学プログラム拡張の可能性も議論し、5ヶ月のプログラムの実現も前向きに検討することとなった。
- ③マレーシアには複数の留学プログラムがあり (AUGP, AUPEP)、さらにプログラム拡張の可能性もあることから、全体的な生活環境の確認と危機管理上の留意点の確認を行った。また、将来の野外研修、実習の可能性も検討し、実現可能性を見出した。
- ④マレーシアでは、週末のマラッカ研修をサポート、指導した。

中国(8月～9月)

多文化フィールドスタディー・AUGP・
AUEP含む

- 訪問先国……中国・香港
- 出張期間……平成28年8月15日～9月7日
- 出張者……国際関係学部准教授 三橋秀彦、
国際交流課主事補 富田祐香
- 主な目的……(1)多文化フィールドスタディー支援(アンケート調査、施設見学ほか)(2)多文化インターンシップ支援(研修先との調整、現地でのオリエンテーション、新規開拓先訪問)(日系6社、中国・香港系3社)(3)AUGP(中国)における企業視察引率(日系4社)(4)AUEP協定校視察(上海外国語大学、華東師範大学)

●行動日程(現地)

日時	訪問先・対応者等	概要
8月15日(月)	午前:東京(羽田)ー北京 午後:北京師範大学	学生指導
8月16日(火)	午後:北京師範大学	学生指導(調査票作成支援)
8月17日(水)	午後:北京師範大学	学生指導(プレテスト支援)
8月18日(木)	午後:北京師範大学	学生指導(プレテスト集計、分析支援)
8月19日(金)	午前:新華書店海淀店 午後:企業訪問(ハウス食品(北京))	資料収集 企業インタビュー支援(対応者 総経理)
8月20日(土)	午前:中国伝媒大学 午後:北京師範大学	次年度の調査協力依頼(対応者 広告学院教授) 学生指導(アンケート票設計支援)
8月21日(日)	午前:故宮博物院 午後:景山公園、北海公園、中国国家図書館	学生引率 学生引率
8月22日(月)	午前:中国国家図書館 午後:北京師範大学	資料収集 学生指導(アンケート調査実施支援)
8月23日(火)	午後:企業訪問(イオンモール(中国)) 北京師範大学	企業インタビュー支援(対応者 高級経理) 学生指導(アンケート調査実施支援)
8月24日(水)	午後:企業視察(ポプラ社)	企業インタビュー支援(対応者 総経理秘書)
8月25日(木)	午前:北京師範大学 午後:企業視察(長富宮飯店)	学生指導(アンケート調査実施支援) 学生引率(対応者 副支配人)
8月26日(金)	午前:企業視察(イオンモール北京国際城店) 午後:北京師範大学	視察 学生指導(アンケート調査集計支援)
8月27日(土)	終日:北京南ー上海虹橋	移動
8月28日(日)	終日:市内見学 うちインターンシップ候補先開拓(極楽湯(上海)) 富田移動	インターンシップ受け入れに関するヒアリング(対応者 管理部副部長)
8月29日(月)	午前:インターンシップ支援(新錦江大酒店、日中平和観光、新華国際旅行社) 午後:インターンシップ支援(AUEP生インターンシップ調整 マイツ(上海))	学生引率 インターンシップ生受け入れに関するヒアリング(対応者 総経理)
8月30日(火)	午前:上海図書館 午後:AUEP協定校訪問(上海外国語大学)	資料収集 新規受け入れに関するヒアリング、施設見学(対応者 日本文化経済学院副教授)
8月31日(水)	午前:インターンシップ支援(横	学生引率

	浜企業企業支援協会、学研広告 (上海) 午後：インターンシップ候補先 開拓（オリンパス（北京）販売 サービス）	インターンシップ受け入れに関するヒアリン グ（対応者 副経理）
9月1日（木）	午前：インターンシップ先イベ ント参加（上海ビエンナーレ（上 海設計双年展）：会場 上海展覧 館） 午後：インターンシップ先イベ ント参加（第43回 横浜産業 倶楽部）	インターンシップ状況視察 インターンシップ状況視察
9月2日（金）	午前：インターンシップ先訪問 （学研広告（上海）、横浜企業経 営支援財団） 午後：AUEP協定校訪問（華 東師範大学） 市内見学	インターンシップ状況視察 交換派遣生の状況に関するヒアリング（対応者 社会発展学院教授）
9月3日（土）	終日：上海（浦東）－深圳 富田帰国	移動
9月4日（日）	終日：深圳－香港－深圳	見学
9月5日（月）	午前：インターンシップ支援（王 氏港建集団）	学生引率（対応者 総経理）
9月6日（火）	午後：インターンシップ候補先 訪問（古河産業（深圳）	インターンシップ受け入れに関する依頼（対応 者 経理）
9月7日（水）	午後：香港－東京（羽田）	移動

●総括

8月15日から9月7日まで中国、香港に滞在し、以下の4つのテーマに関係する学生の現地研修先に赴き、それぞれのテーマで学生支援を実施した。

(1)「多文化フィールドスタディー」：学生達の北京でのアンケート調査の支援として、アンケート票の作成、プレテストの実施、本調査及びデータ集計についての指導を行った。学生達は全体テーマと個別テーマと2つのテーマを持っているため、主として前半は全体テーマ、後半は個別テーマに関する指導となった。今年度の全体テーマが「中国人の贈答行動」であったため、学生達を北京市内の繁華街、観光地、ターミナル等に連れて行き、土産物店を調査させるようにした。

(2)「多文化インターンシップ」：今年度は上海で5社（うち日系3社、中国系2社）9名、東莞で1社（香港系）2名の計11名のインターンシップを支援した。特に今年の特徴は、オフィス業務以外に外部の企業、施設、展示会等を使ったインターンシップが多かったため、期間中は連日上海市内を移動し、学生達のインターンシップの様子を確認して回った。また今年度は日系3社を訪問し、今後のインターンシップ引き受けを依頼した。

(3) AUGP（中国）期間中の企業視察における学生引率。今年も「中国における日本型ビジネス」をテーマに各分野を代表する以下の日系企業を訪ねた。訪問先は次の通り。長富宮飯店（ホテル

ニューオータニグループ）、ハウス食品（中国）、イオンモール、ポプラ社。

(4) 上海では新規に学生交換協定校を締結する予定（当時）の上海外国語大学と、すでに同協定を締結している華東師範大学を訪問し、学生交換先の新規開拓と現地での留学期間中の学習プログラムの深化に関する調整を行うことが出来た。

2014年夏に初めて実施した研修のスタイル（北京、上海、深圳、香港の4か所で4つのテーマで研修を実施）を、今年は規模、内容ともにより充実させた形で実施できた。「多文化フィールドスタディー」の参加者は2014年5名、2015年9名、2016年10名、「同インターンシップ」については2014年4名、2015年9名、2016年11名と年々増加傾向にある、またAUEP派遣先との協議、新規インターンシップ先に開拓等と合わせるとこの夏計16社、機関との調整を行った。制度上は拡大、深化を続けているが、訪問先である北京、上海での移動、調整もそれに合わせて複雑化しており、今後は拡大傾向を抑え、持続可能なスタイルを模索する必要がある。



韓国（8月）

- 訪問先国……韓国
- 出張期間……平成 28 年 8 月 25 日～9 月 1 日
- 出張者……アジア研究所教授 奥田 聡
- 主な目的……多文化インターンシップ実習視察
及び次年度以降の受け入れ交渉のため

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
8月25日（木）		入国
8月26日（金）	街頭アンケート同行（弘大入口）	インターンシップ準備のための学生の街頭アンケートに同行・アドバイス
8月27日（土）	街頭アンケート同行（弘大入口・新村） 関連書籍紹介（永豊書店ほか）	インターンシップ準備のための学生の街頭アンケートに同行・アドバイス プレゼン内容に関連する書籍の紹介
8月28日（日）	アンケート結果取りまとめ プレゼン方針指導	同左
8月29日（月）	日本貿易振興機構ソウルセンター 調査チーム課長ほか 韓日産業技術協力財団 専務理事	インターンシップ受け入れ先への学生同行、次年度以降の受け入れに関する意見交換など 次年度以降のインターンシップ受け入れ要請
8月30日（火）	対外経済政策研究院（KIEP） 国際マ クロ金融本部長、日本チーム長ほか	来年度以降の本学学生インターンの受け入れ要請、執務環境・周辺環境の調査
8月31日（水）	朝日新聞ソウル支局 支局長 プレゼン指導	韓国の政治情勢、学生の職場訪問についての可能性打診ほか 同左
9月1日（木）		帰国

●総括

- ① インターンシップ受け入れ先で行うプレゼンテーションのため、韓国の若者らに対する街頭アンケートを学生が実施し、出張者はこれに同行した。サンプル収集は予想外に苦戦した。後日、前年度のフィールドスタディー参加者の意見を求めたところ、アンケート実施側が複数人数である方がよいこと、韓国の大学・高校の開講期に行った方がよいことなどのアドバイスが得られた。
- ② インターンシップ実施中には毎晩当日の作業内容及び問題点を学生より報告を受け、適宜アドバイスを直接面談あるいはメール交換により与えた。受け入れ先から与えられた課題がやや高度であったため、問題解決のための資料提示、計算例示などサポートを行った。
- ③ 日本貿易振興機構・ソウルセンターにおいては、次年度以降の学生受け入れに関する展望および同機構におけるインターン生受け入れに関する態勢について聞き取りを行った。
- ④ 韓日産業技術協力財団および対外経済政策研究院に対しては、来年度以降のインターンシップ受け入れを要請した。韓日財団については、執務環境、業務内容、先方と当方の要請の摺合せ、実施時期、待遇などについて集中的に意見交換を行った。対外経済政策研究院に対しては、本年度の学生派遣はないものの、次年度以降の受け入れを要請するとともに、開発が進行している周辺環境について改めてチェックを実施した。
- ⑤ 朝日新聞ソウル支局においては将来のインターンシップ受け入れ要請を念頭に置きつつ職場見学の実施状況および執務環境について尋ねた。また、インターンシップ実施時の安全と密接なかわりのある南北関係、朝鮮半島情勢などについて意見交換を実施した。

韓国(3月)

- 訪問先国……韓国
- 出張期間……平成29年3月19日～3月25日
- 出張者……アジア研究所教授 奥田 聡、
国際交流課主事補 矢吹知大
- 主な目的……平成29年度新規学生実習先3機関
を中心に学生実習先を訪問し、実習
受け入れ依頼及び実習内容協議を
行うため

●行動日程(現地)

日時	訪問先・対応者等	概要
3月19日(日)		入国
3月20日(月)	午前：中央大学校 教授 午後：ソウル国際公演芸術祭事務局 事務局長、代理	新規実習先開拓への尽力への御礼、多文化インターンシップ目的・実績説明 実習学生新規受け入れ依頼、実習内容打ち合わせ
3月21日(火)	午前：韓国の家 館長、マーケティング企画チーム長、顧客サービスチーム員、韓国文化財財団 文化遺産活用室長	実習学生新規受け入れ依頼、実習内容打ち合わせ
3月22日(水)	午前：日本貿易振興機構(JETRO) ソウル事務所 所長	実習学生受け入れの御礼
3月23日(木)	午後：対外経済政策研究院(KIEP) 国際巨視金融室長、日本チーム長	実習学生受け入れの御礼、実習学生受け入れ依頼、実習内容打ち合わせ
3月24日(金)	午後：韓日産業・技術協力財団 人材育成チーム長	実習学生受け入れ可能との申し出への御礼、実習先機関視察及び打ち合わせ
3月25日(土)		帰国

●総括

- ① 韓国における新規インターンシップ先機関を開拓するにあたり、尽力いただいた中央大学校教授に御礼の訪問をした。多文化インターンシップの目的及び今年度までの実績について改めて説明し、新規インターンシップ先機関が目的に合致することを確認できた。
- ② 実習希望者1名の受け入れを依頼し、快諾を得た。想定される実習内容の説明があり、実習する可能性のある劇場の内部を視察した。類似の実習の受け入れ実績がないため、実習開始までに連絡を取り合い、内容を決定することで合意した。
- ③ 実習希望者2名の受け入れを依頼し、快諾を得た。想定される実習内容には夏季における屋外での実習、勤務時間が夜間に及ぶ可能性のある内容が含まれているが、屋内での日中時間での実習も選択肢として挙げられ、学生の希望や危機管理の面を総合し、実習開始までに内容を決定することで合意した。
- ④ 今年度の実習学生受け入れ(1人)に対し、謝意を述べた。これまでの実習学生らが実習後に大きく成長したことにかんがみ、今後事情が許せば学生受け入れを再開してくれるよう要請した。
- ⑤ 実習希望者2名の受け入れを依頼し、快諾を得た。学生本人の問題意識に基づくプレゼン実施を軸とする実習内容となること、実習場所、出退勤時間等について協議。前年受け入れ実績に準ずる線で合意した。
- ⑥ 次年度以降、実習学生1名程度の受け入れが可能であるとのこと。外部研究者向けの宿泊施設を提供してもらえるとのこと。勤務場所は小さな事務所であるため、近隣と同業種事業所での業務がある場合にはそちらで勤務することも考慮。セミナー補助、日韓翻訳補助などの業務を想定。

多文化フィールドスタディー

ベトナム(8月)

- 訪問先国……ベトナム
- 出張期間……平成28年8月17日～8月24日
- 出張者……国際関係学部准教授 大塚直樹
- 主な目的……多文化フィールドスタディー(ベトナム)の学生現地調査の引率および新規調査地の開拓

●行動日程(現地)

日時	訪問先・対応者等	概要
8月17日(水)	午後：ホーチミン市第1区 夜：ミーティング	引率学生とホテル周辺の街並みの確認
8月18日(木)	午前：ホーチミン市 午後：ドンコイ通り・ファムグーラオ通り 夜：ミーティング	市内の街並みを確認 景観調査、バンタイン市場の見学
8月19日(金)	午前・午後：ドンコイ通り・デタム通り 夜：ドンコイ通り・ミーティング	店舗調査 観光施設の観察
8月20日(土)	午前・午後：ドンコイ通り・ファムグーラオ通り 夜：ミーティング	観光客へのインタビュー調査
8月21日(日)	午前・午後：ミトー・メコンデルタ 夜：ミーティング	パッケージツアーの参与観察的調査
8月22日(月)	午前：ホテル周辺 午後：ドンコイ通り、サイゴンスカイデッキ 夜：ミーティング	旧市場見学 インタビュー調査、市内の俯瞰的景観観察
8月23日(火)	午前・午後：デタム通り周辺 夜：ミーティング	インタビュー調査
8月24日(水)		帰国

●総括

2016年度、3回目となる学生引率を伴う海外フィールド調査を実施した。今回は、昨年度に引き続き調査地をベトナム最大の経済都市ホーチミン市に設定した。前回同様、異国の地でのインタビュー調査を通じて、参加学生が現場適応力や積極性を身につけられたと実感することができた。インタビュー調査は、約60名から回答を得ており、こちらも教員側の予想を上回る数字であった。昨年度同様、毎晩全員でミーティングをおこない、その日の調査成果や問題点を共有することで、翌日の課題を発見することができた。とくに、今年度は、ミーティングの司会進行を学生に一任した(交代制)。その結果、これまでに見られなかった調査項目の見直しや調査人数の目標設定など現地における臨機応変かつ主体的な活動を引き出すことができた。

今度の課題としては、第1に、さらにフィールド調査の質の向上を目指したい。今年度は、周到的な事前準備をめざし、一昨年度より文献読解などの量を増やした。とはいえ、まだ十分ではなかった。たとえば、ベトナムの観光地の名称など学生が知らなかったため、インタビュー調査が円滑に進まなかった例などの報告を受けた。したがって、出発前(前期授業中)に現地社会について十分な事前学習をおこなうことで、現地体験をより充実したものにできるよう方向づけたい。第2に、例年述べているが、体調管理の大切さである。やはり熱帯の気候下で屋外調査を実施することは、肉体的にも精神的にもさまざまな制約が生じる。今回も1名が体調不良(微熱)で調査を休むことになった。すべての参加学生が十分な休憩をとりつつ、いかに効率的に調査を実施できるかが今後重要となる。

アジア夢カレッジキャリア開発中国プログラムー

現地受入関連

- 訪問先国……中国・大連
- 出張期間……平成28年5月22日～5月26日
- 出張者……アジア研究所教授 西澤正樹、
国際交流課調査役 寺尾浩一
- 主な目的……平成28年度AUCP派遣予定学生(7名)現地受入準備として、大連外国語大学漢学院及びインターンシップ先企業との協議のため

●行動日程(現地)

日時	訪問先・対応者等	概要
5月22日(日)	午前 成田発⇒大連着 午後 大連外国語大学漢学院との打ち合わせ	移動 派遣学生に関する情報伝達、授業内容・寮設備等の確認、男子学生1名の受け入れ依頼
5月23日(月)	午前 日本貿易振興機構大連事務所 在瀋陽日本国総領事館在大連出張駐在官事務所 日本瑞穂実業銀行股份有限公司 大連分行 午後 日本法円坂律師事務所 大連代表処 大連中国国際旅行社 TOMBO 蜻蜓文具商貿(大連)有限公司	留学・インターンシップ予定(7名)の各企業での受け入れ依頼とその確認
5月24日(火)	午前 大連市経済技術開発区 大連三島食品有限公司 午後 富士電機大連有限公司 大連松下汽車電子系統有限公司 米克羅彈簧(大連)有限公司 大連漫歩廣告有限公司	留学・インターンシップ予定(7名)の各企業での受け入れ依頼とその確認
5月25日(水)	午前 德勤華永會計師事務所有限公司 大連分所 大連東芝有限公司 午後 全日本空輸株式会社 瀋陽・大連支店 大連華盈服裝有限公司 みずほ銀行(中国)有限公司大連支店 大連外国語大学との打合せ	留学・インターンシップ予定(7名)の各企業での受け入れ依頼とその確認

5月26日(木)	午前 遼寧傑仕孚(ジャスフ) 律師事務所 大連発⇒成田着	留学・インターンシップ予定(7名)の各企業での受け入れ依頼とその確認 移動
----------	--	--

●総括

①男子学生が1名だけであり、その受け入れ先機関として、大連外国語大学漢学院に依頼し、承諾され良かった。教育機関での受け入れは久しぶりであり、前回のことも踏まえ、研修プログラムを作成してもらうことができた。

②各企業におけるインターンシップ学生受け入れ体制は、毎年のことではあるが、その内容がより充実しており、学生にとっては素晴らしい学びの場だと思った。

オリエンテーション及びキャリア指導など

- 訪問先国……中国・大連
- 出張期間……平成28年8月29日～9月6日
- 出張者……アジア研究所教授 西澤正樹、
国際関係学部特任教授 九門大士、
国際関係学部准教授 青山治世、
国際交流課調査役 寺尾浩一
- 主な目的……夢カレ12期生(7名)を引率し、大連外国語大学にてオリエンテーション及びキャリア指導を行うほか、インターンシップ派遣予定企業との打合せの為

●行動日程(現地)

日時	訪問先・対応者等	概要
8月29日(月)	午前 成田発⇒大連着 午後 大連空港⇒大連外国語大学	移動 学生たちを大連外国語大学まで引率し、入寮手続き等、生活基盤の確保を確認することにより、スムーズな留学生活を開始させることができた。
8月30日(火)	午前 在瀋陽日本国総領事館領事事務所 日本貿易振興機構大連事務所 午後 徳勤華永会計事務所有限公司 大連分所 みずほ銀行(中国)大連支店 大連漫歩広告有限公司 大連中国国際旅行社有限公司 日本法円坂律師事務所 大連代表処 北京大成(大連)律師事務所	・留学・インターンシップ予定(7名)の各企業での担当者との面接。 ・オムニバス講義「中国の仕事と生活」講師依頼。
8月31日(水)	午前 大連愛光浸漬成型有限公司 錦州新区経済技術開発区招商中心招商一局一部 午後 富士電機大連有限公司 東芝大連有限公司 米克羅彈簧(大連)有限公司 成田発⇒大連着(九門)	・留学・インターンシップ予定(7名)の各企業での担当者との面接。 ・オムニバス講義「中国の仕事と生活」講師依頼。 移動

9月1日(木)	午前 大連瑞詩酒店 大連松下汽車電子系統有限公司 午後 大連外国語大学漢学院との打ち合わせ	・留学・インターンシップ予定(7名)の各企業での担当者との面接。 ・オムニバス講義「中国の仕事と生活」講師依頼。
9月2日(金)	午前 全日本空輸株式会社 瀋陽・大連支店 大連三島食品有限公司 午後 北京大成(大連)律師事務所 雅瑪多國際物流有限公司 大連分公司 TOMBO 蜻蜓文具商貿(大連)有限公司	・留学・インターンシップ予定(7名)の各企業での担当者との面接。 ・オムニバス講義「中国の仕事と生活」講師依頼。
9月3日(土)	午前 オリエンテーション「留学・インターンシップの心構え」実施 午後 アジア夢カレッジキャリア開発研修	・留学・インターンシップ開始時にあたり担当教員から、勉強に対する頃構え、インターンシップでの企業からの期待等を伝え、留学・インターンシップ期間をより有意義に過ごすために、どのような意識・態度で臨まなければいけないのかを考えさせる。 ・「アジア夢カレッジキャリア開発研修」の第1回目は、「キャリアとは何か？」等の講義、また、各自の将来の夢などを、中国人ルームメイトと日本人学生とで意見交換し、その相違等を認識する。また、大連で過ごす期間に、自分自身の帰国後のキャリアを考えるためのヒント(手段)を示唆し、中国人ルームメイトと日本人学生全体で達成する目標を設定する。
9月4日(日)	午前 グローバルキャリアプログラム(旅順地域等視察・歴史講義) 大連発⇒成田(青山・九門)	・大連外国語大学旅順キャンパス地域の視察及び担当教員からの歴史講義実施 移動
9月5日(月)	午後 大連外国語大学漢学院との打ち合わせ	授業等の打ち合わせ
9月6日(火)	大連発⇒成田着(西澤・寺尾)	移動

●総括

- ①グローバルキャリアプログラムを実施して2年目になるが、学生たちの歴史等を含む現地理解も進み、インターンシップを行う際の基本知識となっている。教科書で習う歴史ではなく、現場での歴史学習は、学生たちにとって有効だと思う。
- ②学生たちが一日も早く現地になれるよう、様々な研修を行っているが、もう少し積極的に受講してほしいものだ。ルームメイトの補助がなければ、生活基盤確立もままならない状況だ。

キャリア研修等

- 訪問先国……中国・大連
- 出張期間……平成28年11月12日～11月16日
- 出張者……国際関係学部特任教授 九門大士、国際交流課調査役 寺尾浩一
- 主な目的……アジア夢カレッジ12期生（7名）に対し、大連外国語大学にてキャリア開発研修を実施する為

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
11月12日（土）	成田発⇒大連着	移動
11月13日（日）	午前 アジア夢カレッジキャリア開発研修準備 午後 アジア夢カレッジキャリア開発研修実施	中国人学生との合同キャリア研修第2回目の実施 （将来の方向性を見出すためのアカデミックな手法を紹介し、各人が実際に検証してみる。また、その結果を発表し合い、情報共有する。）
11月14日（月）	午前 大連外国語大学との打ち合わせ 午後 大連発⇒成田着（九門）	漢学院での授業終了後の学生移動に関する打ち合わせ・車両等手配 移動
11月15日（火）	午後 大連外国語大学漢学院との打ち合わせ	冬季市内宿舎に関する打ち合わせ
11月16日（水）	午後 大連発⇒成田着（寺尾）	移動

●総括

①「アジア夢カレッジキャリア開発研修」の第2回目は、中国人学生のキャリアに対する意識が少しずつ変化しているのに気づいた。将来は親に進められた進路（就職先）を決めると考えていたのが、本研修及び日本人学生との共同生活のために、今までと違う進路を考え始めている学生がいた。また、そのような中国人学生と意

見交換をすることで、「今までの中国の若い人たちの考え方」を学び、座学では学ぶことのできないことを、日本人学生が学ぶことによって、「中国と日本の架け橋的人材の育成（本プログラムの目標）」が可能となるのだと思った。中国人学生の理解度が高く、日本人学生との大きな違いだと思った。

管理部門執行部との協議

- 訪問先国……中国・大連
- 出張期間……平成28年12月6日～12月8日
- 出張者……国際交流課調査役 寺尾浩一
- 主な目的……大連外国語大学管理部門執行部との国際交流に関する総合的な打ち合わせ

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
12月6日（火）	午前 成田発⇒大連着 午後 大連外国語大学国際交流処長との打ち合わせ	移動 大連外国語大学新人事体制の確認
12月7日（水）	午前 大連外国語大学国際交流処長との打ち合わせ	両大学の協力関係に関する確認

	午後 大連外国語大学漢学院・日本語学院・英語学院との打ち合わせ	都市創造学部留学プログラムに関する打ち合わせ
12月8日(木)	午後 大連発⇒成田空港着	移動

●総括

大連外国語大学においては、現在まで特別の理解と配慮をもって、本学国際交流プログラムに対し、多大なるサポートを提供していた、役職者数名が定年や他の理由によって、若手役職者に交代した。

新学長の元、アジア夢カレッジの派遣時期の変更、また、都市創造学部の英語(英語学院)と中

国語授業(漢学院)とインターンシップという新しいプログラムの開始等、プログラム内容が多岐にわたり、大幅に変更となることを考慮すると、1月のアジア夢カレッジ大連出張時に、本学と大連外大のトップ会談を設定するのが望ましいと考えている。今回の出張はその準備協議のための出張であった。

修了式、企業訪問等

- 訪問先国……中国・大連
- 出張期間……平成29年1月15日～1月25日
- 出張者……栗田充治学長、
アジア研究所教授 西澤正樹、
アジア研究所教授 奥田 聡、
国際関係学部特任教授 九門大士、
国際交流センター部長 宇田川裕、
国際交流課長 西川修治、
国際交流課調査役 寺尾浩一
- 主な目的……アジア夢カレッジ12期生修了式、
キャリア開発研修実施、及び受入企業からの意見聴取の為

●行動日程(現地)

日時	訪問先・対応者等	概要
1月15日(日)	午前 成田発⇒大連着(西澤・寺尾) 午後 修了式の打合せ (ニューワールドホテル・他業者)	移動 ・修了式会場視察、機材チェック、レイアウト等詳細打合せ
1月16日(月)	午前 大連愛光浸漬成型有限公司 富士電機大連有限公司 錦州新区経済技術開発区招商中心招商一局一部 午後 大連三島食品有限公司 米克羅彈簧(大連)有限公司 在瀋陽日本国総領事館領事事務所	・アジア夢カレッジ12期生のインターンシップ先企業を訪問し、学生の就業体験期間の様子を聴取し、評価票を受領する。その上で、学生の成長の様子を確認する。 ・オムニバス講義「中国の仕事と生活」に関する意見聴取。 ・来年度の留学候補学生等の情報伝達。
1月17日(火)	午前 日本貿易振興機構大連事務所 大連松下汽車電子系統有限公司	・アジア夢カレッジ12期生のインターンシップ先企業を訪問し、学生の就業体験期間の様子を聴取し、評価票を受領する。その上で、学生の成長の様子を確認する。 ・オムニバス講義「中国の仕事と生活」に関する意見聴取。 ・来年度の留学候補学生等の情報伝達。

	午後 大連中国国際旅行社有限公司 大成律师事务所 大連瑞詩酒店 大連漫歩广告有限公司	
1月18日(水)	午前 みずほ銀行(中国)大連支店 全日本空輸株式会社 瀋陽・大連支店 午後 日本法円坂律师事务所 大連代表処	<ul style="list-style-type: none"> ・アジア夢カレッジ12期生のインターンシップ先企業を訪問し、学生の就業体験期間の様子を聴取し、評価票を受領する。その上で、学生の成長の様子を確認する。 ・オムニバス講義「中国の仕事と生活」に関する意見聴取。 ・来年度の留学候補学生等の情報伝達。
1月19日(木)	午前 徳勤華永会計事務所有限公司 大連分所 東芝大連有限公司	<ul style="list-style-type: none"> ・アジア夢カレッジ12期生のインターンシップ先企業を訪問し、学生の就業体験期間の様子を聴取し、評価票を受領する。その上で、学生の成長の様子を確認する。 ・オムニバス講義「中国の仕事と生活」に関する意見聴取。 ・来年度の留学候補学生等の情報伝達。
1月20日(金)	午前 大連空港発⇒成田空港(学長他2名) 午後 学長一行を大連空港出迎え 修了式会場等視察(ニューワールドホテル)	<p>移動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・修了式会場視察、機材チェック、レイアウト等詳細打合せ
1月21日(土)	午前 在大連開発区企業でのインターンシップ生の市内宿舎への引越し支援 午後 大連外国語大学長と亜細亜大学長の打ち合わせ 日中学生キャリア開発研修実施 帰国後の履修指導に関する説明会実施 アジア夢カレッジ修了式開催	<ul style="list-style-type: none"> ・在開発区企業寮から市内宿舎への引越し支援 ・日中学生キャリア開発研修会場視察、機材チェック、レイアウト等詳細打合せ <p>両大学のトップ会談により今後の協力関係の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日中学生キャリア開発研修(第3回目)の実施：本キャリア研修を通じての気づき、将来の進路、帰国後の具体的行動計画を発表し、各自で共有する。 ・帰国後のゼミ選択、他の授業等履修の説明を行う。 ・大連外国語大学長、亜細亜大学長、他大学教職員及び在大連企業代表者・担当者を招待してアジア夢カレッジ12期生の修了式を実施。
1月22日(日)	午前 学長(他3名)ホテル発⇒大連空港へ 学長一行空港へ見送り 午後 学長(他3名)大連空港⇒成田空港	<ul style="list-style-type: none"> ・学長一行移動(帰国)

1月23日(月)	<p>午前 大連外大との打ち合わせ・各種精算 教員2名 ホテル発⇒大連空港へ</p> <p>午後 謝恩会開催ホテルとの精算 教員2名 大連空港⇒成田空港</p>	<p>次期(13期生)の打ち合わせと事務所経費等の精算 移動</p> <p>次年度の打ち合わせ等</p>
1月24日(火)	<p>午前 本学学生との帰国時の注意事項等説明会開催</p> <p>午後 大連外国語学院国際交流処長との打合せ</p>	<p>・空港、チェックイン荷物等の注意事項を学生に伝達。</p> <p>・大連外国語大学の来年度のスケジュール、本学学生の受け入れに関する事項等の確認。</p>
1月25日(水)	<p>午前 大連空港にて学生と合流</p> <p>午後 大連空港発⇒成田空港着</p>	<p>・空港での出発手続きサポート</p> <p>移動</p>

●総括

- ①インターンシップ開始前に、本学学生に対し、インターンシップに関するオリエンテーション(企業側からの期待感、心構え、マナー等)を開催できたことは大変有意義であった。8月末に留学が始まって以来、座学中心で語学習得を中心に過ごしてきた学生たちが、企業の方々のもとでインターンシップをすることの意義等を伝えたときに、学生たちは自らの態度を変更しなければならないと気付いたからだ。この気づきが無いと、各インターンシップ先で習得できることは少ないと思う。学生たちには今後も機会あるごとに、このような気づきを与えることこそが、大切だと思った。
- ②インターンシップ期間終了後に、各企業担当者に受け入れ学生を、グローバル・ビジネスリテ

ラシーアセスメントシートにて、評価を頂いているが、企業から興味をもたれるケースが増えてきた。特にこれをもとに帰国後のキャリア開発研修を行っているところに、興味が集中している。多くの企業では目標管理、人事考課などの制度を導入し、その後の人材育成にそのデータを利用している為だと思う。学生たちが、インターンシップの機会に、評価制度等を理解しておくことは、就職活動の際も有効活用できると思う。

- ③12月出張時に、大連外国語大学での準備協議があったため、両大学のトップ会談で今後の協力関係が確認された。さまざまな留学プログラムが、円滑に運営できることが確認できた。

NAFSA年次大会出展

デンバー・ソルトレイクシティ
(5月～6月)

- 訪問先国……アメリカ
デンバー・ソルトレイクシティ
- 出張期間……平成28年5月29日～6月9日
- 出張者……国際関係学部講師 太田瑞希子、
国際交流課長 西川修治、
国際交流課調査役 寺尾浩一、
国際交流課主事補
ノボタニ・ケイシー
- 主な目的……グローバル人材事業の一環として、
世界最大の国際教育交流フェアである NAFSA 年次大会で本学紹介
ブースを出展し、本学の教育内容を
広く周知するとともに、現協定校の
関係強化と新たな協定校の開拓に
つなげるため。また、年次大会終了
後、AUAP（亜細亜大学アメリカプ
ログラム）の新たな派遣先候補大学
を訪問調査し、関係者と協議を行う
ため。

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
5月29日（日）	午後：デンバー着	スケジュール等に関する打合せ
5月30日（月）	正午：NAFSA 参加登録、ブ ース設置作業 午後：Study in Japan ブース 現地オリエンテーション	JAFSA、JASSO 事務局、確認ポイント等に関 する打ち合わせ
5月31日（火）	終日：Expo Hall にてブース展 示及び他ブース訪問 午前：SUNY（ニューヨーク州 立大学オールバニ校）との会合 Associate Vice Provost for International Education Managing Director of Intensive ESL CENTER FOR INTERNATIONAL EDUCATION & GLOBAL STRATEGY (CIEGS) 午後：Orange Coast College Director, Global Engagement Center ブース対応 Study Abroad Foundation(SAF)主催レセプ ション	亜細亜大学の紹介及びネットワーキング AUAP（亜細亜大学アメリカプログラム）の新 たな派遣先候補大学 プログラムの実施に向けての具体的な情報交換 新しく立ち上げる短期留学プログラムの実施に ついて協議 SAF 関係大学関係者とのネットワーキング
6月1日（水）	終日：Expo Hall にてブース展 示及び他ブース訪問 午前：WWU（ウェスタンワシ ントン大学）との会合 Director AUAP	亜細亜大学の紹介及びネットワーキング AUAP の今後の展開及び 中国・大連外国語大学との連携について協議

	<p>正午：Study in Japan レセプション 各大学ブースにて</p> <p>午後：SDSU (サンディエゴ州立大学) との会合 ALI Recruiting Director</p> <p>セッション参加：Japan SIG</p>	<p>協定校を招待しての意見交換会とネットワーキング</p> <p>今後のプログラム展開についての協議</p> <p>日本の国際教育交流のあり方について</p>
6月2日(木)	<p>終日：Expo Hall にてブース展示及び他ブース訪問</p> <p>午前：University of Manitoba (マニトバ大学) との会合 Business Development Coordinator (International)</p> <p>ASU (アリゾナ州立大学) との会合 Program Coordinator, Group and Custom Programs</p> <p>WWU との会合 Director, AUAP</p> <p>午後：セミナー参加及びポスターセッション訪問</p> <p>Irvine Valley College との会合</p> <p>協定校との情報交換会 (CWU, WWU)</p>	<p>垂細垂大学の紹介及びネットワーキング</p> <p>短期留学プログラムの進捗状況及び改善点などについて協議</p> <p>AUAP の今後の展開及び改善点などについて協議</p> <p>AUEP (交換派遣留学) の今後の展開及び改善点などについて協議</p> <p>新しく立ち上げる短期留学プログラムの実施について協議</p>
6月3日(金)	<p>半日：Expo Hall にてブース展示及び他ブース訪問</p> <p>午前：Tacoma Community College との会合</p> <p>午後：撤収作業、閉会式参加</p>	<p>垂細垂大学の紹介及びネットワーキング</p> <p>新しく立ち上げる短期留学プログラムの実施について協議</p>
6月4日(土)	<p>午前：ソルトレイクに移動</p> <p>午後：ホームステイ斡旋企業と会談 Associate Director/Salt Lake City, OvECS Ltd. ホストファミリー候補訪問調査</p>	<p>翌年度の学生派遣に向けて、生活の基盤となるホームステイプログラムを調査</p>
6月5日(日)	<p>終日：ソルトレイク市内治安状況、交通手段とアクセス、生活環境等調査</p>	<p>ダウンタウンを中心に調査</p>
6月6日(月)	<p>午前：The University of Utah(ユタ大学)訪問 Director, Continuing Education & Community Engagement Program Manager</p> <p>午後：Salt Lake Community College 訪問</p>	<p>授業、図書館、学生会館、食堂、宿舍などの環境調査 本学の意向を伝えつつ、プログラムの実施可能性について協議</p> <p>新しく立ち上げる短期留学プログラムの実施について協議</p>

	Director, International Student Services	
6月7日(火)	午前：ソルトレイク発 サンフランシスコ着	※フライトが遅延のため、国際線に乗り継ぎができず、サンフランシスコで一泊
6月8日(水)	午後：サンフランシスコ発	
6月9日(木)		帰国

●総括

グローバル人材育成推進事業を開始して、NAFSAでのブース出展3回目となった。当初は要領が得られていなかったため、効率的に協定校との会合や新たな大学とのミーティングが組むことが困難だったが、年々円滑に準備し様々な大学の現在と今後のプログラム運営について協議することができている。

今回は、セメスター留学を基本とした留学制度を新たに立ち上げるミッションを中心に精力的に候補大学との折衝を行った。特に出発前に有力候補校としていたThe University of UtahではNAFSAでのセッションだけでなく、実際にキャンパスを訪問して、授業、施設、予算等について詳細に情報を入手した。(その成果として、帰国

後、学内での会議体での承認を経て、2017年度からパイロット・プログラムとして実際に学生を約10名派遣することが決まった。)

既にプログラムを運用している複数の協定校とも会談を行い、改善すべき点などについて詳細協議を行うことが、今後より効果的な教育に発展させる道筋を立てた。

派遣だけでなく、受入れプログラムに関しても、夏季休暇中に短期で実施している「亜細亜大学ジャパンプログラム」をブースにて説明し、アメリカ人学生のニーズ調査を行うことができたのも成果をいえる。今後、内容、経費、運営体制等を協議して、次年度の意向の受入拡大につなげたい。

AUAP

ニューヨーク州・オールバニ市
(7~8月)

- 訪問先国……アメリカ
- 出張期間……平成 28 年 7 月 27 日～8 月 1 日
- 出張者……国際交流課長 西川修治、
国際交流課調査役 寺尾浩一、
国際交流課主事補
ノボタニ・ケイシー、
国際交流課嘱託職員 森澤友紀
- 主な目的……AUAP（亜細亜大学アメリカプログラム）の新たな派遣先候補大学を訪問調査し、関係者と協議を行うため

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
7月27日（水） 午後	UA1695 21：30 シアトル発	
7月28日（木） 午前 午後	5：38 ニューアーク着 6：30 ニューアーク発 10：00 オールバニ着 SUNY(ニューヨーク州立大学)オールバニ校 訪問 Mark Rentz, Associate Vice Provost for International Education Managing Director of Intensive ESL CENTER FOR INTERNATIONAL EDUCATION & GLOBAL STRATEGY (CIEGS) オールバニ市生活環境調査	関係者との会合 キャンパスツアー（国際交流センター、学生寮等） アジア研究所教授との打ち合わせ ダウンタウン、交通機関確認、病院・クリニック視察など
7月29日（金） 午前 午後	SUNY(ニューヨーク州立大学)オールバニ校 訪問 ホームステイコーディネーターとのミーティング ホームステイ先訪問	ESL 授業視察 キャンパスツアー（図書館、自習室、食堂、ジム等） 運営方針について協議 生活環境調査
7月30日（土） 午前 午後	UA1559 11：35 オールバニ発 12：57 シカゴ着 UA1641 16：30 シカゴ発 19：09 シアトル着 ホテルチェックイン	（アメリカ国内移動）
7月31日（日） 午後	NH177 13：20 シアトル発 翌8月1日（月）15：40 成田着	

●総括

AUAP（亜細亜大学アメリカプログラム）の新たな派遣候補大学を訪問した。特に ESL 方式で派遣できる大学であり、以前現協定校である

Arizona State University で勤務していたディレクターが移籍した大学であり、より綿密な連携が可能であるとの理由で候補大学とした。また、アメリカ東海岸の大学を開拓することによって、より多様化する学生ニーズに応えられると予想している。

実際に訪問し、授業はもちろん、キャンパスの施設、さらに大学周辺の環境、市内の利便性、治安などの面で、十分に派遣先として適切であることを確認することができた。

早ければ、次年度の募集に向けて、今年度中に審議・会議体での承認を得る方向で進めたい。

（その成果として、帰国後、学内での会議体での承認を経て、2017年度からパイロット・プログラムとして実際に学生を約10名派遣することが決まった。）



ユタ州・ソルトレークシティー
 ニューヨーク州・オールバニー市
 (3月)

- 訪問先国……アメリカ
- 出張期間……平成 29 年 3 月 21 日～3 月 29 日
- 出張者……国際関係学部教授 新井敬夫
- 主な目的……AUAP の新しい派遣先大学となる
 ニューヨーク州立大学オールバニー校・ユタ大学の授業及び生活環境を
 調査するため

●行動日程 (現地)

日時	訪問先・対応者等	概要
3月 21 日 (火)	東京-ソルトレークシティー 移動	ソルトレークシティー着後、ホームステイ住宅 視察 (レベッカ・ワットレイ氏)
3月 22 日 (水)	午前 ユタ大学語学センター 午後 ユタ大学キャンパス	ユタ大学担当者との面談、英語クラスの視察 ユタ大学施設見学 (語学センター助手と)
3月 23 日 (木)	午前 ソルトレークシティー 午後 ソルトレークシティーから移 動	大学周辺、ソルトレークシティーおよび近郊視察 (危機管理対策含む=語学センター助手と) 天候不順で航空機遅延、シカゴ緊急滞在
3月 24 日 (金)	午前 シカゴ 午後 シカゴからオールバニーへ移 動	シカゴ緊急滞在 オールバニー着後、 学生ホームステイ住宅視察
3月 25 日 (土)	ニューヨーク州立大学オール バニー校 オールバニー市および近郊	ディレクターと新規留学プログラムに関する打 ち合わせ 学習資源、生活施設調査
3月 26 日 (日)	オールバニー市、ニューヨ ーク市 (移民資料館、国連本部 等)	学生の生活圏、休日旅行圏の危機管理対策視察、 および国際関係学科生の留学中研修候補地視察
3月 27 日 (月)	午前 ニューヨーク州立大学オール バニー校 午後 ニューヨーク州議会、州庁舎 ニューヨーク州立大学オール バニー校 ダウンタウンキャンパス	大学施設見学後、ディレクターと国際センター スタッフ 2 名と新規留学に関する打ち合わせ。 留学中の実地学習施設調査 (政治経済系)、州庁 舎の係官と見学実習の可能性協議。 大学院を含む旧キャンパス図書館の視察
3月 28 日 (火)	オールバニーよりシカゴ経由 で帰国 (日本着、29 日)	

●総括

- ①AUAP 新規候補 2 大学とも、語学を含む教育
プログラムは良好、かつスタッフの対応も意欲
的で新規発足の実現可能性は極めて高い。
- ②ホームステイ住宅、および周辺の生活環境も良
好であり、概ね生活に支障はないと考えられる。
- ③大学外周辺地域での国際関係学部学生の学習
資源 (博物館、公共施設、その他) も豊富で、

単なる語学学習以上のグローバル人材育成と
しての学習機会を提供できると思われる。

- ④今後は、今次の調査で確認できなかった語学以
外の科目 (単位) の開設または聴講機会の設定
についてさらなる議論が必要となる。

新規協定大学・インターンシッププログラム開拓

インド(5月)

- 訪問先国……インド（チェンナイ）
- 出張期間……平成28年5月8日～5月12日
- 出張者……国際関係学部特任教授 九門大士、国際交流課調査役 寺尾浩一
- 主な目的……インド（チェンナイ）マドラス大学との学術交流協定締結を目的とした現地調査の為

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
5月8日（日）	成田空港発 シンガポール着（泊）	移動
5月9日（月）	シンガポール発 チェンナイ着 午後 マドラス大学国際関係学部 長への表敬訪問及び打ち 合わせ	移動 マドラス大学の国際交流等に関する情報収集及 び本学の情報提供
5月10日（火）	午前 マドラス大学国際関係学部 長との打ち合わせ 午後 在チェンナイ JETRO 事務 所訪問	マドラス大学での留学生の実態把握、大学内意 思決定メカニズムの確認 チェンナイブリーフィング及び意見交換
5月11日（水）	チェンナイ発 シンガポール着（泊）	移動
5月12日（木）	シンガポール空港発 成田空港着	移動

●総括

①インド独特の意思決定メカニズムがあり、新規案件に対し決定スピードがあまりにも遅い。

JETRO 事務所からは、人間関係構築が重要であるとのアドバイスがあった。

インド・シンガポール (10月)

- 訪問先国……インド（チェンナイ・バンガロール）、多文化インターンシップ（シンガポール：九門）
- 出張期間……平成28年10月3日～10月9日
- 出張者……国際関係学部特任教授 九門大士、国際交流課調査役 寺尾浩一
- 主な目的……インド（チェンナイ）マドラス大学及びバンガロール大学との学術交流協定締結を目的とした現地調査の為
多文化インターンシップにおける学生受け入れ企業訪問（九門）

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
10月3日（月）	羽田空港発（10/2 深夜） シンガポール経由チェンナイ着 午前 マドラス大学国際関係学部長と打ち合わせ 午後 マドラス大学国際関係学部長への表敬訪問及び打ち合わせ	移動 協定締結のための打ち合わせ
10月4日（火）	午前 マドラス大学国際関係学部長との打ち合わせ 午後 マドラス大学政治顧問への表敬訪問	協定締結のための打ち合わせ 協定締結に関する情報交換
10月5日（水）	午前 チェンナイ発バンガロール着 午後 在バンガロール領事事務所訪問	移動 バンガロール現地事情ブリーフィング
10月6日（木）	午前 バンガロール大学外国語学部長との打ち合わせ 午前 バンガロール市内視察	バンガロール大学の国際交流事情等情報収集及び協定締結に向けた情報交換 市内の交通時事上等安全確認
10月7日（金）	バンガロール発 シンガポール着（泊）	移動
10月8日（土）	シンガポール空港発（寺尾） 成田空港着 午後 インターンシップ受入企業訪問(九門) NAA シンガポール Compass Holdings Media Japan Prestige International	移動 今年度受け入れ学生のインターンシップ内容等の情報収集

●総括

①マドラス大学での手続きがまったく進んでいない。そのためかカウンターパートの上司との面談が予定された。バンガロール大学に関しては、ここ数年で大学全体の組織改革が進むそう

で、現在締結したとしても、新組織体制になった場合は、協定の効力が失効するので、組織改革後の締結がベストであるとのアドバイスがあった。

海外交流拠点開設

シンガポール

- 訪問先国……シンガポール
- 出張期間……平成 29 年 3 月 28 日～3 月 30 日
- 出張者……栗田充治学長、
国際交流課調査役 寺尾浩一
- 主な目的……海外交流拠点（シンガポール）を開設し広報する為

●行動日程（現地）

日時	訪問先・対応者等	概要
3 月 28 日（火）	成田空港発 シンガポール着（泊）	移動
3 月 29 日（水）	午前 海外交流拠点開所式 （Compass Holding 社内） NNA シンガポール社の取材 午後 多文化インターンシップ協 力会社との意見交換	海外交流拠点事務所に備品等を搬入し開所 海外交流拠点開所理由等に関してメディアの取材を受ける インターンシップ受け入れ状況に関し、学長が意見聴取
3 月 30 日（木）	シンガポール空港発 成田空港着	移動

●総括

- ①本学第 1 号の海外交流拠点事務所の開設をおこなった。この事務所では、本学の学生が海外交流活動を行う際にサポートサービスを提供するだけでなく、卒業生ネットワークの構築等、

日本ではできないサービスを提供することにより、本学のグローバル化をさらに加速させるものである。